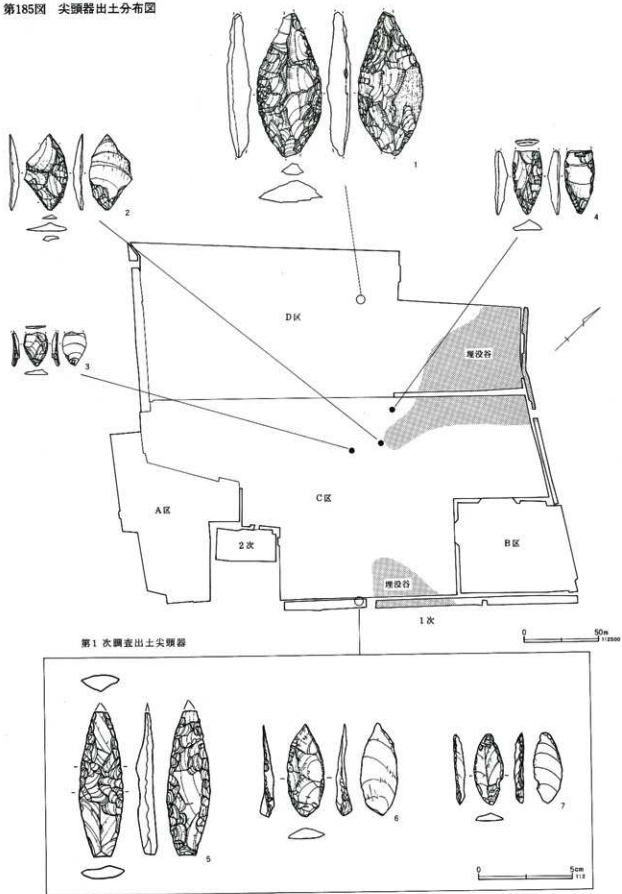


第185図 尖頭器出土分布図



(4) 尖頭器石器群について

埼玉県、特に大宮台地は尖頭器石器群の良好な発掘資料は少ない。しかし、最近の調査報告によって資料の蓄積がわずかであるが進んでいる。その意味で、新屋敷遺跡の複数回の調査で、尖頭器石器群が検出されている意味は大きい。尖頭器を含む石器集中は第1次調査の1箇所のみであるが、谷頭周辺に散漫な分布がみられる。また、今回出土した、縄状剥離を有する黒曜石製の大形の尖頭器は谷の西側で少し離れた地点から検出された。

県内で縄状剥離を有する尖頭器を出土した遺跡を挙げると、大宮台地は伊奈町の戸崎前遺跡から、尖頭器

の欠損品と削片がまとまっている。大宮市の中川貝塚から黒曜石製の小形品が単独で出土している。武蔵野台地は入間市の西武蔵野遺跡が最も資料が充実しており、尖頭器に伴う削片とナイフ形石器、搔・削器、彫器等が組成している。富士見市の打越遺跡第2地点は砂川期のナイフ形石器の集中から少し離れ、単独で出土している。調査者の所見では、ナイフ形石器と尖頭器は供伴するとしている。和光市の花ノ木遺跡からは削片と大形の尖頭器2点、城山南遺跡からは大形の尖頭器が1点検出されている。県北部は熊谷市の龍原後遺跡、本庄市の地神遺跡からそれぞれ単独で出土している。

参考文献

- 荒井幹夫 1976 「富士見市文化財報告Ⅱ」富士見市教育委員会
- 岩瀬 謙 1998 「地神／塔頭」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第193集
- 加藤秀之 1997 「武蔵野台北東縁部・入間台地の概要」『埼玉考古別冊第5号—埼玉の旧石器時代—』埼玉考古 pp.14-21
- 君島勝秀・西井幸雄 1997 「滝の宮坂遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第183集
- 鴻巣市市史編さん調査会 1989 「鴻巣市史 資料編1 考古」鴻巣市
- 鈴木一郎 1994 「城山南遺跡（第1次・第2次）」和光市埋蔵文化財調査報告書第14集
- 須藤隆司 1996 「中部・東海・北陸地方におけるV・IV下層段階の石器群—列島内対比の視点から—」『石器文化研究』5 石器文化研究会 pp.451-464
- 田代 治 1998 「中川貝塚」『第5回石器文化研究交流会—発表要旨—』第5回石器文化研究交流会とちぎ実行委員会 pp.30-33
- 田中英司 1997 「戸崎前遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第187集
- 西井幸雄 1989 「中三谷遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第76集
- 1994 「花ノ木・向原・柿ノ木坂・水久保・丸山台」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第134集
- 1996 「丸山／青梅道南／十文字原／東武蔵野／西武蔵野」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第164集
- 1996 「新屋敷遺跡C区」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第183集
- 1996 「V—IV下層段階の細分」『石器文化研究』5 石器文化研究会 pp.341-352
- 野口 淳 1996 「ナイフ形石器」『石器文化研究』5 石器文化研究会 pp.179-188
- 村松 篤 1997 「龍原裏遺跡」『埼玉考古別冊第5号—埼玉の旧石器時代—』埼玉考古 p.153

2. 古墳群における供献の様相

(1) はじめに

新屋敷遺跡の古墳群は、鴻巣市教育委員会の2次にわたる調査の後、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団により4地区が調査され、前方後円墳（帆立貝形）1基の他、76基に及び円墳が確認された。墳丘を残すものは全く無く、主体部が検出されたのも第51号墳1基のみであったが、古墳の周溝からは、須恵器、土師器、石製紡錘車、鉄製品、埴輪など多くの遺物が出土した。また、多くの古墳の周溝覆土中には、榛名山二ツ岳の噴火に伴う火山灰であるいわゆるFAが良好な状況で検出されており、遺物編年の年代的な指標が得られるなど多くの成果をあげた。

これらの遺物は埴輪を除くと古墳に供献されたものがほとんどと思われるが、このうち須恵器高坏、甕、土師器壺、甕は比較的限られた古墳から出土したもので、大半の古墳に供献されていたのはいわゆる模倣坏である。したがって、ここでは、模倣坏に着目し古墳群での供献の様相を整理してみたい。

(2) 各古墳の遺物の検出状況

古墳群には1基の前方後円墳（帆立貝形）があるが、他は全て円墳で、ブリッジを持つものと持たないものがある。第186図は全測図の中に、模倣坏を中心に検出された状況（1）周溝底部に置かれたもの、（2）墳丘裾部に供献されたと思われるもの、（3）破碎され周溝覆土から検出されたもの、の3種類に大まかに分類し、出土位置を概念的に示したものである。また、埴輪についても、樹立された状況で検出された埴輪はないが、周溝からの出土状況から明らかに埴輪が伴うと思われる古墳について、埴輪片の出土範囲を示したものである。以下は各古墳の環の検出状況について簡単にまとめたものである。

第4号墳 ブリッジを持つ。模倣坏は3個体検出されている。ブリッジの右側（古墳外部から墳丘に向かって、以下全て同じ。）の周溝底部に3個体セットで置か

れたものと思われる。

第7号墳 ブリッジを持つ。模倣坏は南側周溝底部に1個体置かれた状況で検出された。

第8号墳 ブリッジを持つ。模倣坏は3個体検出されている。1つはブリッジ右側の周溝底部に置かれた状況で出土したもので築造時の供献と思われる。他の2個体は覆土中からの出土で、墳丘裾部に供献されたものと思われる。

第11号墳 ブリッジを持つ。模倣坏は3個体検出されている。1つは北東側周溝の底部に置かれたもので完形である。他の2個体は覆土からの出土で、離れた位置から出土したものが接合しており、墳丘裾部に供献されたものと思われる。

第13号墳 ブリッジを持つ。模倣坏は3個体検出されている。1つはブリッジの右側から、1つはブリッジの左側から、さらに2m程離れた位置からもう1個体が検出された。いずれも周溝底部に置かれたものほぼ完形である。

第14号墳 ブリッジを持つ。模倣坏は5個体検出されている。ブリッジ右側の周溝底部に置かれたものほぼ完形である。3個体がまとまっており他の2個体は40～50cmの間隔をおいて1個体、また1個体と置かれていた。出土したレベルから5個体同時の供献と考えられるが、その中であって3個体がセットとして供献されている点注目される。

第15号墳 ブリッジを持つ。模倣坏は4個体検出されている。いずれも破片の状況で出土したものである。ブリッジの右側から1個体破碎された状況で出土した。ブリッジ左側から出土した2個体は墳丘裾部に供献されたものが流れ込んだものと思われる。他に北側周溝から1個体出土している。

第16号墳 ブリッジを持つ。模倣坏は1個体検出されている。ブリッジ右側の周溝底部に置かれたものと思われるが、周溝の遺存状況が悪く破片で出土した。

第17号墳 ブリッジを持つ。模倣坏は2個体検出され

ており共に完形品である。1個体はブリッジ左側の周溝底面に置かれたものと思われる。もう1個体は北東側周溝に置かれたものと思われる。

第20号墳 ブリッジを持つ。模倣環は1個体検出されている。完形品で、ブリッジ右側の周溝底面に土師器甕と共に置かれた状況で出土した。

第22号墳 ブリッジを持つ。模倣環は1個体検出されている。ブリッジ右側の周溝覆土中からの出土であるが小片であり供献された状況は不明である。墳丘裾部に供献されたものが流れ込んだ可能性が考えられる。

第23号墳 ブリッジを持つ。模倣環は2個体検出されている。1つはブリッジの右側の周溝底部に置かれたもので完形である。1つは北側周溝から出土したもので墳丘裾部に供献されたものと思われる。

第24号墳 ブリッジを持つ。模倣環は1個体検出されている。南東側周溝から出土したもので墳丘裾部に供献されたものと思われる。

第25号墳 ブリッジを持つ。模倣環は1個体検出されている。ブリッジの右側の周溝底部に置かれたものである。

第26号墳 ブリッジを持つ。模倣環は4個体検出されている。いずれもブリッジの右側から破砕された状況で出土したものであるが、3個体がまとまって出土し1.5m程離れたやや高いレベルからもう1個体が出土した。2次の供献と思われる。

第28号墳 ブリッジを持つ。模倣環は1個体検出されている。東側周溝底部に置かれたものである。

第29号墳 ブリッジを持つ。模倣環は3個体検出されている。ブリッジ右側の周溝底部に3個体重ねて置かれたものである。

第32号墳 ブリッジを持つ。模倣環は2個体検出されている。ブリッジ右側と左側の周溝底面に1個体ずつ置かれたもので、共に完形品であり築造直後の供献と思われる。

第35号墳 ブリッジを持つ。新屋敷遺跡で調査された古墳の中では最も豊富に土器を出土した古墳のひとつである。遺物の分布状況は、ブリッジ南側、ブリッジ

北側、北側周溝の大きく3つのブロックに分けられる。このうち模倣環を含むのは、ブリッジ南側と北側周溝である。ブリッジ南側のブロックは、周溝底面に据え置かれた状況と、墳丘裾部から流れ込んだ状況に分けられる。据え置かれた状況の一群の中には2個体が置かれていた。流れ込んだ状況のものには4個体あるが、出土位置と出土層位から考え3個体のグループと1個体とに分けることが可能である。これらは、周溝がやや埋まった段階で周溝に置かれたともみられる。北側周溝からは細かく破砕された環が2個体分出土しているが、環には型的な特徴に明らかな差異が認められるものが混在している状況でありセット関係は捉えられない。

第39号墳 北側周溝から石製紡錘車が出土しており、その周辺から3個体の模倣環が出土している。出土状況は明確ではないが、3個体の模倣環と紡錘車が供献されたものと理解される。他にも単体で周溝覆土から坏片が出土しており、墳丘裾部での供献が考えられる。

第40号墳 模倣環は4個体検出されている。いずれも残存率50%以下の状況で明らかな供献の様相を示すものとは言えない。

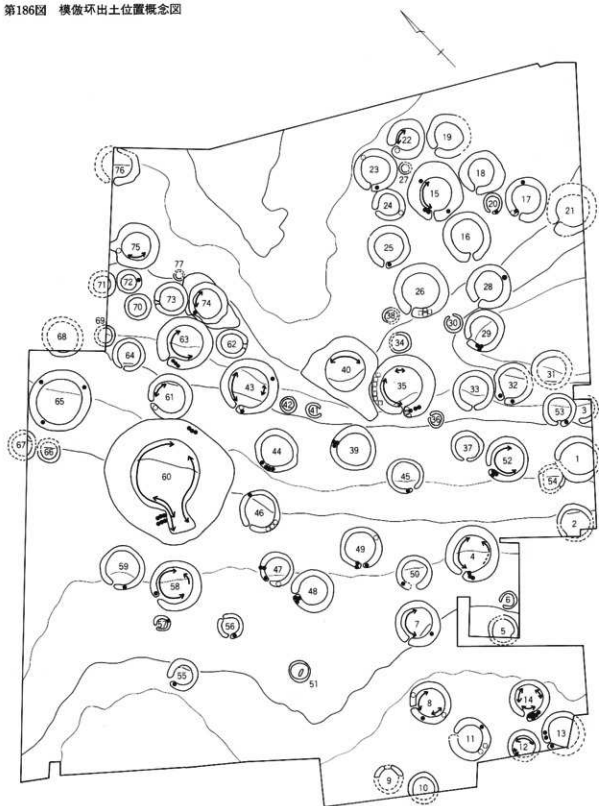
第43号墳 ブリッジを持つ。模倣環は3個体検出されている。ブリッジ右側の周溝底面に1個体置かれた状況で検出された。1個体は同じブリッジ右側の墳丘裾部から流れ込んだ状況で検出されている。また東側周溝の底面に置かれた状況でもう1個体検出されている。

第44号墳 模倣環は4個体検出されている。西側周溝底面に3個体がまとまって置かれた状況で検出され、1m程離れたやや高いレベルから1個体の環と石製紡錘車が出土した。

第45号墳 ブリッジを持つ。模倣環は1個体検出されている。ブリッジ左側の周溝底面に壺と共に置かれた状況で出土した。

第46号墳 ブリッジを持つ。模倣環は4個体検出されている。1個体は北側周溝底面に伏せた状況で置かれていた。他の3個体は、南側周溝の墳丘側上端付近に

第186図 模倣坏出土位置概念図



凡 例

- 周溝底に置かれた模倣坏
- 周溝内に流れ込んだ模倣坏
- 破碎された模倣坏
- ← 埴輪出土範囲

0 40m

3個体重なった状態で出土したもので、墳丘裾部に供献されたものが周溝内に落ち込んだものと思われる。他にも覆土中から環の小片が出土しているが、供献の状況は不明である。

第47号墳 ブリッジを持つ。模倣環は4個体検出されているが、1個体は坏身模倣環である。ブリッジの左側に坏身模倣環が1個体出土し約2.5m北側に2個体が周溝底面よりやや浮いた状態で検出されている。またブリッジの右側からは、墳丘裾部から流れ込んだ状態で1個体出土している。

第48号墳 ブリッジを持つ。環は3個体検出されている。ブリッジの右側の周溝底面に配置されたものと思われ、赤彩された模倣環と埴タイプの環が重なった状態で検出された。やや離れた位置からもう1個体の模倣環が検出されており同時の供献と捉えられる。

第49号墳 ブリッジを持つ。模倣環は出土していない。出土したのは鬼高1式古段階の内湾するタイプの環が4点である。模倣環ではないが参考に出土状況を図に加えた。ブリッジの左側に2個体、ブリッジの右側からは1個体出土している。出土層位と土器の特徴からはほぼ同時期の供献と考えられる。また、東側周溝覆土中からは1個体が単独で出土している。

第50号墳 ブリッジを持つ。ブリッジ左側の周溝がある程度埋まった段階で掘られた溝内土壌から、坏と埴が重なった状態で出土した。溝内土壌の覆土は埋め戻したもので、追葬の埋葬施設の可能性が高い。

第52号墳 ブリッジを持つ。模倣環は3個体検出されている。ブリッジ右側の周溝底面に三角形に配置され、1点は伏せた状態で置かれていた。

第53号墳 ブリッジを持つ。模倣環は1個体検出されている。ブリッジ右側の周溝底面に置かれた状態で出土した。

第55号墳 ブリッジを持つ。模倣環は出土していないが、土師器の平底の坏と埴が出土している。ブリッジ右側の周溝底面に置かれた状態で検出された。

第58号墳 ブリッジを持つ。模倣環は1個体検出されている。ブリッジ右側の周溝底面にステップ状の段差

があり、そこから傾いた状態で出土した。ほぼ完形であり、周溝の規模から考えると流れ込んだものではなく、置かれたものと見るのが妥当であろう。

第57号墳 ブリッジを持つ。模倣環は1個体検出されている。ほぼ完形で、ブリッジの反対側に当たる南東側周溝底面に置かれた状態で出土した。

第58号墳 ブリッジを持つ。模倣環は2個体検出されている。1個体はブリッジ左側の周溝底面に置かれた状態で出土したもので、他の1個体は破碎されたものと思われる周溝覆土中から出土している。

第59号墳 ブリッジを持つ。模倣環は1個体検出されている。ブリッジ右側の周溝に置かれた状態で出土したものであるが、周溝底面からはかなり浮いた状態であり、築造時の供献とは考えにくい。

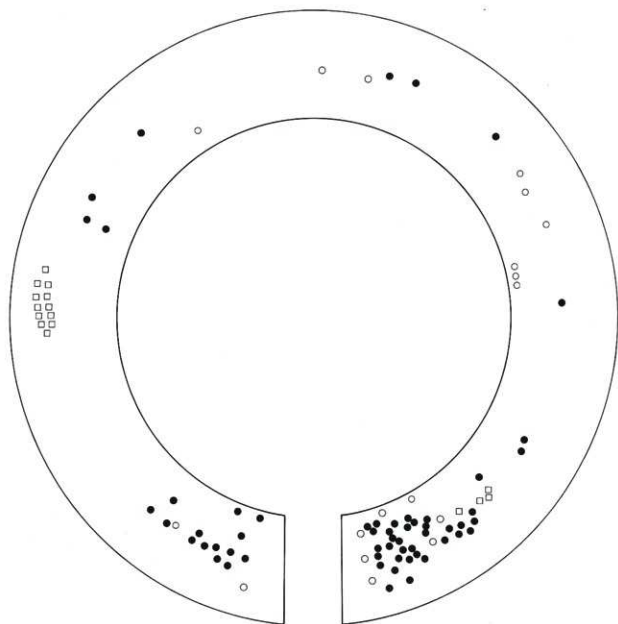
第60号墳 帆立貝形の前方後円墳である。模倣環は9個体検出されている。西側裾れ部に須恵器を伴う土器集中が2箇所ありいずれも3個体ずつをセットとして置かれたものである。東側周溝の外側立ち上がり付近から3個体まとめて出土している。他の供献された遺物も豊富にあるが、本文と重複するので省略する。また、埴輪もほぼ全体的に樹立されていたようであるが、特に西側裾れ部に多い。

第61号墳 ブリッジを持つ。模倣環は1個体検出されている。ブリッジ右側の墳丘側周溝立ち上がり上部から置かれた状態で出土したものである。墳丘裾部に置かれたものが流れ込んだものかあるいは、ある程度周溝が埋まった段階で置かれたものと思われる。

第63号墳 ブリッジを持つ。模倣環は3個体検出されている。3個体ともブリッジ右側の周溝底面に置かれたもので内1個体は伏せた状態で出土した。

第65号墳 大形だがブリッジを持たない。環は3個体検出されている。北側、西側、東側の3箇所の周溝で出土したもので、墳丘寄りの立ち上がり部に置かれたものと考えられる。いずれも周溝がある程度埋まってから供献されたものと思われる。器形の特徴に差異が認められ、一度に供献されたものではない可能性がある。

第187図 ブリッジと模倣坏出土位置の関係



凡 例

- 周溝底に置かれた模倣坏
- 周溝内に流れ込んだ模倣坏
- 破碎された模倣坏

第72号墳 模倣環は1個体検出されている。南東側周溝中央に置かれた状態で出土した。周溝底からやや浮いていた。

第74号墳 環は1個体検出されている。第63号墳・第73号墳と接する西側周溝から破砕された状態で出土した。

第75号墳 模倣環は1個体検出されている。北西側周溝に張り出しがありその近くから出土したものである。残存状況から、墳丘裾部に供献されたものが後に流れ込んだものと思われる。

以上が各古墳の状況である。

(3) 模倣環の供献の様相

模倣環が供献されていた古墳は38基あり、供献された個体総数は約90個体である。その内の約65%が周溝底面に置かれたものであった。

第187図はブリッジの位置に注目した場合、ブリッジと模倣環の出土位置の関係を概念的に図に示したものである。

ブリッジを持つ古墳では、模倣環の総数は66個体で、ブリッジ右側の周溝底面に置かれたものが37個体と60%近くを占める。周溝底面に1個体だけを供献している古墳は10基あり、その内ブリッジの右側の周溝底面に模倣環が供献された古墳は7基である。

このように、ブリッジを持つ円墳の場合、ブリッジを中心として特に右側(南側)に模倣環が供献されるのが基本的なパターンと言ってよいだろう。

ひとつの古墳でも、周溝底面に置かれた他、墳丘裾部に置かれたものもあり、古墳によっては数次の供献がなされている。各古墳の状況ではブリッジ周辺の周溝底面に置かれたものが築造時の一義的な供献と思わ

れるものが多い。

また供献の様相の中で、3個体をセットとして供献している古墳が目を引く。2個体を周溝底面に置いているのは第35号墳と第47号墳である。それに対し3個体をセットとしているのは10基あり、全てブリッジの右側での供献であった。2個体と比べると圧倒的に出現頻度が高い。数が増せば出現頻度は下がるのが普通であろう。単純に数にこだわることは無意味だが、ブリッジ右側の一義的な供献の儀礼の中で何らかの意識が働いているのは確かと思われる。

新屋敷遺跡の76基の円墳のうち明らかにブリッジを持つものが45基ありそのほとんどが西側に付く。ブリッジを東側に付けるのは、第30号墳と第41号墳の2基のみである。また埴輪が樹立されていたと思われる古墳も、その樹立位置が西側に偏っているのも明らかである。供献された土器で周溝の底に置かれたものは、第187図の示すとおりブリッジの周辺、特にブリッジ右側に集中する。これらを考え合わせると、供献にあつては西側のブリッジを中心に正面観を有していたものと考えられる。

第30号墳と第41号墳は共に小円墳である。第30号墳は、第15号墳、第16号墳、第28号墳と共通した儀礼空間を、第41号墳は、第36号墳、第35号墳、第40号墳と共通した儀礼空間を有していたものと考えられる。小円墳であるが故に占地と儀礼空間との制約から東側にブリッジを設けたものとする。同様に供献にあつても儀礼空間の変遷により、供献する場が変わった可能性も考えられる。

以上簡単に供献の様相を示したが、今後他の古墳群等の成果とも合わせ検討したい。

参考文献

- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992 「新屋敷遺跡—B区—」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第123集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994 「新屋敷遺跡—A区—」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第140集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1996 「新屋敷遺跡—C区—」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第175集

3. 新屋敷古墳群の様相

新屋敷遺跡の調査は、昭和60年に実施された鴻巣市教育委員会の調査を端緒に、当事業団が農事試験場跡地にかかわる発掘調査を平成3年6月から開始し、平成7年9月までの約5年間継続的に調査を行い、先土器時代から近世にわたる各時代において多大な成果をあげてきた。

ここでは農事試験場跡地に関連する今までの調査成果を踏まえ、新屋敷遺跡における古墳群の様相について簡単に問題点を整理したいと思う。

(1) 古墳群の分布と墳丘規模

新屋敷古墳群 新屋敷遺跡とその南側に広がる生出塚遺跡は、鴻巣市教育委員会の継続的な調査の結果、本来同一の遺跡群として把握し得るものであることが明らかにされてきた。生出塚遺跡は、現在までに埴輪窯跡40基、工房跡2基、粘土採掘坑跡1基、住居跡9軒、古墳跡18基が調査され、埴輪生産域と集落域、墓域等の空間構造の一端が把握されている(山崎1995)。

古墳群の分布については、新屋敷遺跡から途切れることなく生出塚遺跡まで広がっていることが判明して

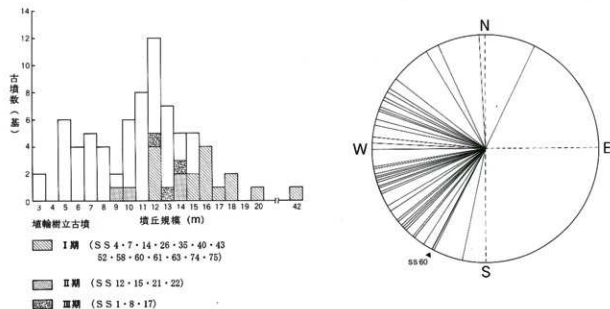
おり、かつては両遺跡に分布する古墳を総称して生出塚古墳群と呼称し、新屋敷遺跡内に位置する古墳を新屋敷支群、生出塚遺跡内のものを生出塚支群と便宜的に区分してきた経緯がある(鴻巣市1989)。

しかし、現在までの調査成果からすれば古墳群の主体は新屋敷遺跡内にあることが明らかであり、ここでは『埼玉県古墳群詳細分布調査報告書』(埼玉県教育委員会1994)の記載に従い、新屋敷遺跡内の古墳を新屋敷古墳群、同様に生出塚遺跡内の古墳を生出塚古墳群と呼称し、両者を総称する場合には生出塚・新屋敷古墳群としたと思う。

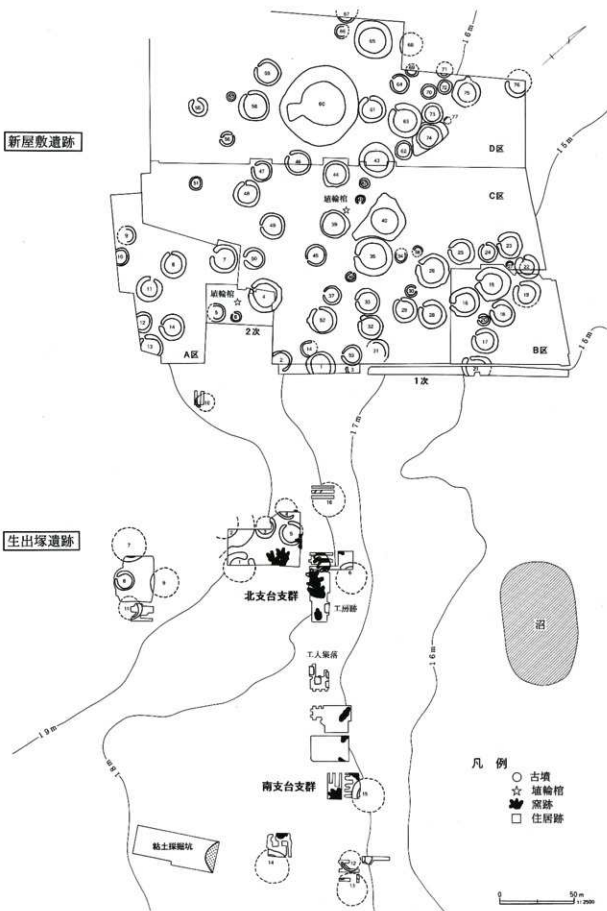
墳丘規模 新屋敷古墳群で確認された合計77基の古墳のうち、調査区外にかかるため墳形及び墳丘規模の不確実な第3号墳と第68号墳を除いた75基を対象に墳丘規模等について検討を加える。

帆立貝形前方後円墳の第60号墳は、全長42.5mを測り、群中では傑出した規模を誇る。後円部の直径は円墳の中で最大のものを凌駕している。円墳では、墳丘径20.1mを測る第65号墳が最大で、墳丘径3.4mの第77号墳が最小である。第65号墳に次いで、墳丘径18.8

第188図 墳丘規模及びブリッジ方位



第189圖 新屋敷・生出塚遺跡概念圖



mの第35号墳と墳丘径18.3mの第40号墳がほぼ同規模で続いている。群内では墳丘径15m以上のものが14基を数え、全体の約19%を占めている。さらに、墳丘径10~14mの間に全体の51%にあたる38基が集中し、その中でも墳丘径12m代のものが12基を数え、最も多い。また、墳丘規模の偏りをみると、墳丘径5~8mにもう一つのまとまりが存在することが分かる。

以下では、便宜的に墳丘径15m以上のものを大型墳、墳丘径9~14mのものを中型墳、墳丘径3~8mのものを小型墳に区分して記述していく。

埴輪樹立古墳の様相 埴輪を出土した古墳の数は、少量の円筒埴輪片等も含めると大半の古墳から出土している。しかし、築造当初に埴輪を樹立していたと推定できる古墳は21基ほどに限られ、全体の約3割程度の古墳に埴輪が樹立されていたにすぎない。

埴輪樹立古墳の様相は、各時期を通じて相対的に墳丘規模の大きな古墳に限定されたあり方を示している。古墳群の広がりが北側のD区から次第に南側の生田塚古墳群へ推移しているため、新屋敷古墳群内では時期が下るに従い古墳の築造数が減少し、それと同時

に埴輪樹立古墳の数も少なくなっている。

時期別の埴輪樹立古墳の推移については、後述する円筒埴輪の時期区分によれば1期の古墳が最も多く14基を数え、大型墳を中心に墳丘径12m代の中型墳までに埴輪の樹立が確認されている。しかし、円墳では最大規模の第65号墳のみが例外的に埴輪が樹立されていなかったようである。埴輪規模以外の要因によって埴輪の樹立が規制された可能性が考えられる。

II期は墳丘規模が相対的に縮小し、中型墳を中心に4基の古墳に埴輪が樹立され、墳丘径14mの第15・21号墳と、墳丘径10m前後の第21・22号墳の二つのグループに分かれる。II期では墳丘径14m前後の古墳が最大規模であるため、I期同様埴輪規模の大きなものに樹立された傾向が窺われる。しかし、第21・22号墳は埴輪樹立古墳としては最も規模が小さく、埴輪規模以外の別の要因によって埴輪が樹立された可能性もあり、古墳被葬者と埴輪生産との結びつきなどについて今後検討する必要がある。

III期は第1・8・17号墳の3基の古墳に埴輪の樹立が確認されている。埴輪樹立古墳数の減少については

新屋敷・生田塚遺跡調査古墳一覧

【新屋敷遺跡】

(単位: m)

古墳名	墳形	墳丘径	周溝幅/深	ブリッジ方位	出土遺物	FA 時期	文献	備考
新屋敷1号墳	円墳	14.4	19.3	2.7/0.7	不明	無	6 C 後	4-10 第54号墳直視
新屋敷2号墳	円墳	11.7	14.0	2.1/0.4	南西	無	6 C 後	4-10
新屋敷3号墳	円墳	—	—	—	南西	無	6 C 後	4 1次調査5号土壇
新屋敷4号墳	円墳	16.5	22.8	4.0/0.9	N-110°-W	有	5 C 末	4-10
新屋敷5号墳	円墳	10.0	13.6	1.6/—	不明	無	—	4
新屋敷6号墳	円墳	6.0	7.1	0.8/—	N-78°-W	無	—	4
新屋敷7号墳	円墳	12.2	19.4	2.7/1.0	N-103°-W	無	6 C 初	8
新屋敷8号墳	円墳	13.1	17.6	2.6/0.9	N-60°-W	無	6 C 後	8
新屋敷9号墳	円墳	8.3	11.8	1.5/0.3	不明	無	6 C 後	8
新屋敷10号墳	円墳	10.0	12.1	1.3/0.3	不明	無	—	8
新屋敷11号墳	円墳	11.5	17.1	3.0/0.9	N-31°-W	無	6 C 後	8
新屋敷12号墳	円墳	10.2	13.3	3.4/0.8	不明	無	6 C 中	8
新屋敷13号墳	円墳	12.5	16.6	2.3/0.7	N-87°-W	無	6 C 後	8
新屋敷14号墳	円墳	12.3	17.1	2.9/1.0	N-120°-W	無	6 C 前	8
新屋敷15号墳	円墳	14.3	23.4	5.8/0.3	N-130°-W	無	6 C 前	7

古墳名	墳形	墳丘径	周溝径	周溝幅/深	ブリッジ方位	出土遺物	FA	時期	文献	備考
新屋敷16号墳	円墳	14.5	20.9	3.5/0.1	N-153°-W	土師器杯・甕、円筒埴輪	無	6C前	7	
新屋敷17号墳	円墳	12.7	17.9	3.2/1.0	N-107°-W	土師器杯・壺、紡錘車、円筒埴輪(田期)、朝顔形埴輪、形象埴輪(人物・馬)	無	6C後	7	
新屋敷18号墳	円墳	12.3	18.9	4.2/0.2	N-112°-W	土師器杯、円筒埴輪、形象埴輪(馬)	無	6C中	7	
新屋敷19号墳	円墳	13.2	18.4	3.0/0.1	N-90°-W	土師器杯・甕、円筒埴輪、形象埴輪(家)	無	6C中	7	
新屋敷20号墳	円墳	6.8	8.5	1.2/0.3	N-130°-W	土師器杯・甕	有	6C中	7	
新屋敷21号墳	円墳	14.7	20.0	2.9/0.3	N-84°-W	円筒埴輪(II期)、形象埴輪(人物・馬)	無	6C初	7	
新屋敷22号墳	円墳	9.9	15.5	3.9/0.3	N-69°-W	土師器杯・短頸壺、須恵器甕・提瓶、円筒埴輪(II期)、形象埴輪(人物・馬・不明)	無	6C中	7・10	
新屋敷23号墳	円墳	12.8	18.3	3.3/0.8	N-120°-W	土師器杯、須恵器甕、円筒埴輪	無	6C前	10	
新屋敷24号墳	円墳	10.1	13.6	2.3/0.4	N-69°-W	土師器杯、円筒埴輪、形象埴輪(人物)	無	6C前	10	
新屋敷25号墳	円墳	12.8	18.1	3.1/0.5	N-123°-W	土師器杯、紡錘車、円筒埴輪(1期)、形象埴輪(馬)	有	6C初	10	大型円筒埴輪
新屋敷26号墳	円墳	16.7	23.6	3.7/0.5	N-109°-W	土師器杯、須恵器甕、紡錘車、円筒埴輪(1期)、形象埴輪(人物・馬・家)	有	6C初	10	
新屋敷27号墳	円墳	3.9	5.0	0.7/0.1	不明		無		10	
新屋敷28号墳	円墳	13.5	19.1	3.7/0.5	N-100°-W	土師器杯、円筒埴輪	有	6C初	10	
新屋敷29号墳	円墳	12.8	17.6	2.8/1.0	N-75°-W	土師器杯・埴・高坏・壺・甕、須恵器甕、朝顔形埴輪	有	6C初	10	
新屋敷30号墳	円墳	6.3	8.0	1.3/0.3	N-26°-E		無		10	
新屋敷31号墳	円墳	11.7	15.3	3.1/0.6	不明		無		10	
新屋敷32号墳	円墳	13.2	17.2	2.9/1.5	N-104°-W	土師器杯・壺・ミニチュア・甕、土玉、円筒埴輪(1期)	有	6C初	10	
新屋敷33号墳	円墳	13.3	17.6	2.6/1.3	N-135°-W	土師器甕、円筒埴輪	有	6C初	10	
新屋敷34号墳	円墳	7.4	9.1	1.4/0.5	不明	円筒埴輪	有	6C初	10	
新屋敷35号墳	円墳	18.8	27.2	5.1/1.2	N-135°-W	土師器杯・短頸壺・直口壺・壺・甕・鉢、須恵器高坏・甕、紡錘車、朝顔形埴輪、円筒埴輪(1期)、朝顔形埴輪、形象埴輪(人物・馬・大刀)	有	5C末	10	
新屋敷36号墳	円墳	5.6	6.8	1.0/0.3	N-24°-W	土師器甕、形象埴輪(人物)	無		10	
新屋敷37号墳	円墳	10.2	12.9	1.9/0.4	N-130°-W		有	6C初	10	
新屋敷38号墳	円墳	5.6	6.4	0.6/0.3	不明		無		10	
新屋敷39号墳	円墳	15.9	19.7	2.6/0.8	全周	土師器杯、紡錘車	無	6C初	10	埴輪付石
新屋敷40号墳	円墳	18.3	26.0	5.0/0.5	全周	土師器杯、須恵器甕、紡錘車、円筒埴輪(1期)、朝顔形埴輪、形象埴輪(人物・馬)	有	6C初	10	周溝張り出し部
新屋敷41号墳	円墳	5.1	6.8	0.6/0.3	N-132°-W		無		10	
新屋敷42号墳	円墳	5.6	7.0	1.1/0.3	全周		無		10	
新屋敷43号墳	円墳	17.5	24.6	3.6/1.2	N-106°-W	土師器杯・壺・甕、須恵器甕、円筒埴輪(1期)、朝顔形埴輪、形象埴輪(人物・馬・不明)	有	6C初	10・11	
新屋敷44号墳	円墳	15.1	18.6	2.3/0.8	全周	土師器杯・甕、須恵器甕、紡錘車、刀子、円筒埴輪、形象埴輪(鈴)	有	5C末	10	
新屋敷45号墳	円墳	12.8	14.9	1.5/0.8	N-168°-W	土師器杯・壺・ミニチュア	有	6C初	10	
新屋敷46号墳	円墳	15.0	18.3	2.0/0.5	N-99°-W	土師器杯・高坏、須恵器甕、紡錘車	無	5C末	10・11	
新屋敷47号墳	円墳	11.2	14.4	2.1/0.8	N-105°-W	土師器杯、円筒埴輪	無	6C中	10	
新屋敷48号墳	円墳	13.1	17.9	3.0/0.6	N-58°-W	土師器杯	有	6C初	10	
新屋敷49号墳	円墳	13.5	17.5	2.4/0.6	N-141°-W	土師器杯・壺、紡錘車	有	5C後	10	
新屋敷50号墳	円墳	11.3	14.7	2.7/0.7	N-140°-W	土師器杯・埴、須恵器甕	有	6C初	10	周溝内土壌
新屋敷51号墳	円墳	7.3	9.3	1.1/0.3	全周		無		10	木棺埋葬
新屋敷52号墳	円墳	15.1	19.4	2.6/1.1	N-70°-W	土師器杯・直口壺、紡錘車、朝顔形埴輪、土玉、円筒埴輪(1期)、朝顔形埴輪、形象埴輪(人物・馬)	有	6C初	10	
新屋敷53号墳	円墳	11.1	13.9	1.9/0.8	N-134°-W	土師器杯・高坏・埴・ミニチュア、須恵器甕、紡錘車、土玉、円筒埴輪、形象埴輪(人物)	有	6C初	10	
新屋敷54号墳	円墳	8.4	10.8	1.1/0.3	南	土師器高坏	無		10	第1号墳と重複
新屋敷55号墳	円墳	9.8	13.0	1.8/1.0	N-68°-W	土師器杯・埴	無	6C前	11	
新屋敷56号墳	円墳	7.6	10.8	1.8/0.45	N-3°-W N-129°-W	土師器杯	無	6C前	11	
新屋敷57号墳	円墳	5.4	6.6	1.05/0.2	N-63°-W	土師器杯	無	5C末	11	
新屋敷58号墳	円墳	16.1	21.5	3.0/1.1	N-78°-W	土師器杯・甕、須恵器甕、紡錘車、刀子、毛紡形鉄製品、円筒埴輪(1期)、朝顔形埴輪、形象埴輪(人物)	有	5C後	11	線刻両紡錘車
新屋敷59号墳	円墳	14.6	17.8	2.2/0.5	N-106°-W	土師器杯、不明鉄製品、円筒埴輪	有	6C初	11	
新屋敷60号墳	前方後円墳	42.5	54.0	10.5/1.7	N-152°-W (主軸方位)	土師器杯・壺・鉢・甕、須恵器高坏・甕・甕、紡錘車、鉢、鉄錘、鉄刀、刀子、U字形刀先、鎌、鉄製品、円筒埴輪(1期)、朝顔形埴輪、形象埴輪(人物・家・馬・不明)	有	5C後	11	帆立貝前方後円墳

古墳名	墳形	墳丘径	周溝径	周溝幅/深	ブリッジ方位	出土遺物	FA	時期	文献	備考
新屋敷61号墳	円墳	15.3	18.8	2.1/1.0	N-64°-W	土師器坏、紡錘車、刀子、円筒埴輪(1期)、朝顔形埴輪、形象埴輪(人物)	有	6 C初	11	
新屋敷62号墳	円墳	10.0	12.8	1.9/0.5	N-147°-E	土師器坏、円筒埴輪	無	6 C前	11	
新屋敷63号墳	円墳	16.3	24.3	4.4/0.8	N-90°-W	土師器坏・埴・直口壺・壺・甕、須恵器鉢・甕、紡錘車、円筒埴輪(1期)、朝顔形埴輪	有	5 C後	11	
新屋敷64号墳	円墳	11.0	13.4	1.4/0.6	N-113°-W		有	6 C初	11	
新屋敷65号墳	円墳	20.1	27.7	4.4/1.6	全周	土師器坏・高坏・壺・甕、須恵器鉢、円筒埴輪	有	6 C初	11	
新屋敷66号墳	円墳	7.9	10.3	1.5/0.4	不明		無		11	
新屋敷67号墳	円墳	(8.6)	(11.4)	1.5/0.7	不明		有	6 C初	11	
新屋敷68号墳	円墳	—	—	2.1/1.4	不明	土師器埴	無		11	
新屋敷69号墳	円墳	6.7	8.6	1.0/0.4	不明		無		11	
新屋敷70号墳	円墳	8.7	11.0	1.4/0.25	全周	土師器鉢・壺	無	6 C前	11	
新屋敷71号墳	円墳	(5.7)	(9.2)	2.1/0.4	不明	土師器鉢	無		11	
新屋敷72号墳	円墳	7.7	10.5	1.6/0.55	全周	土師器坏	有	6 C初	11	
新屋敷73号墳	円墳	11.0	14.4	1.8/0.7	N-52°-W	土師器坏・小壺・甕、円筒埴輪	有	6 C初	11	
新屋敷74号墳	円墳	12.7	17.5	2.6/0.75	全周	土師器坏・甕・壺、須恵器鉢、円筒埴輪(1期)、形象埴輪(家)	有	6 C初	11	周溝張り出し部
新屋敷75号墳	円墳	12.9	20.9	3.85/0.65	全周	土師器坏・壺、須恵器鉢、紡錘車、円筒埴輪(1期)	有	6 C初	11	周溝張り出し部
新屋敷76号墳	円墳	(12.0)	(17.0)	3.2/0.5	N-133°-W		有	6 C初	11	
新屋敷77号墳	円墳	(3.4)	(3.8)	0.45/0.1	不明		無		11	

〔生出塚遺跡〕

(単位：m)

古墳名	墳形	墳丘径	周溝径	周溝幅/深	ブリッジ方位	出土遺物	FA	時期	文献	備考
生出塚1号墳	円墳	13.0	20.8	4.1/0.6	N-7°-W	土師器坏、紡錘車、円筒埴輪(Ⅱ期)	無	6 C後	1	1次調査
生出塚2号墳	円墳	10.0	—	11.2/1.8	不明	円筒埴輪(Ⅱ期)、朝顔形埴輪、形象埴輪(家)	無	6 C中	1	飯立貝形古墳？ 1次調査
生出塚3号墳	円墳	11.0	14.0	2.5/0.6	不明	円筒埴輪(Ⅲ期)、形象埴輪(人物・馬)	無	6 C後	1	1次調査
生出塚4号墳	円墳	12.0	15.0	1.8/0.2	N-77°-W		無		1	1次調査
生出塚5号墳	円墳	15.9	19.2	2.1/0.8	N-70°-W		無	6 C末	1	1次調査
生出塚6号墳	円墳	18.4	24.0	3.2/1.8	不明	須恵器模範、円筒埴輪(Ⅳ期)、朝顔形埴輪、形象埴輪(人物・馬)	無	6 C末	2	横六式石室 A地点
生出塚7号墳	円墳	—	—	—/—	不明		無		4-9	H地点
生出塚8号墳	円墳	10.0	13.0	—/—	南西	土師器坏	無	6 C後	4-9	H地点
生出塚9号墳	円墳	—	—	—/—	不明	土師器坏、円筒埴輪、形象埴輪	無	6 C後	4-9	H地点
生出塚10号墳	円墳	7.0	8.8	1.2/0.2	北西		無		3	I地点
生出塚11号墳	円墳	10.0	13.6	2.2/0.5	不明		無		5	K地点
生出塚12号墳	円墳	10.0	13.3	0.9/0.3	西	須恵器平板	無	7 C前	5	L地点
生出塚13号墳	円墳	9.6	13.3	2.7/0.7	南西		無		5	L地点
生出塚14号墳	円墳	15.0	—	—/—	不明		無		9	P地点
生出塚15号墳	円墳	15.0	—	—/—	不明		無		9	W地点
生出塚16号墳	円墳	—	—	3.0/—	北西		無		6	R地点

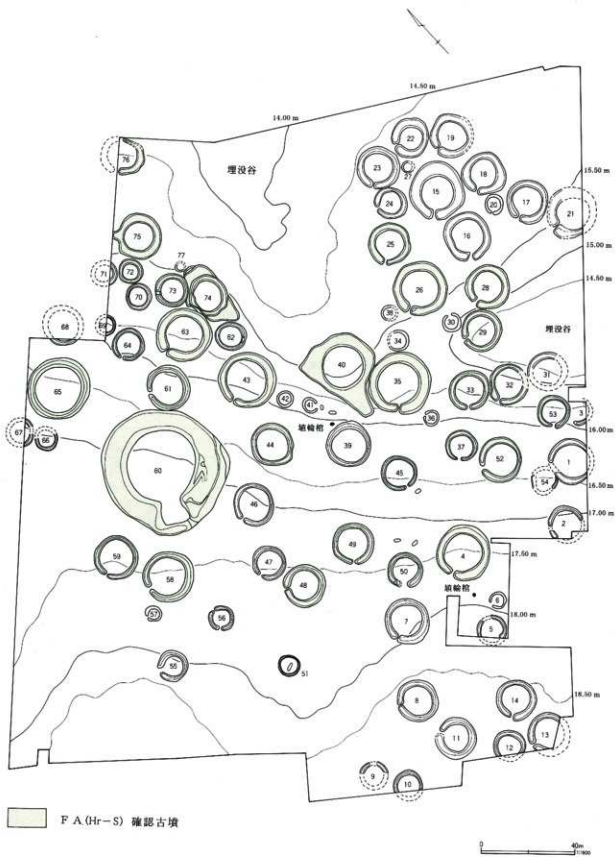
※ 墳丘規模の()は推定値である。

円筒埴輪の時期区分に関しては、山崎 武「鴻巣市遺跡群Ⅱ-生出塚遺跡・D・E地点(本文・図版編)」1995年を参照した。

〈文献一覧〉

1. 鴻巣市遺跡調査会 1981 「生出塚遺跡」鴻巣市遺跡調査会報告書第2集
2. 鴻巣市教育委員会 1987 「鴻巣市遺跡群Ⅱ-生出塚遺跡A地点-」鴻巣市文化財調査報告書第2集
3. 鴻巣市教育委員会 1989 「鴻巣市遺跡群Ⅴ-生出塚遺跡G・I地点-」鴻巣市文化財調査報告書第5集
4. 鴻巣市 1989 「鴻巣市史」資料編1 考古
5. 鴻巣市教育委員会 1990 「鴻巣市遺跡群Ⅵ-生出塚遺跡K・L地点-」鴻巣市文化財調査報告書第6集
6. 鴻巣市教育委員会 1992 「鴻巣市遺跡群Ⅶ-生出塚遺跡R・S・V地点-」鴻巣市文化財調査報告書第8集
7. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992 「新屋敷遺跡-B区-」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第123集
8. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994 「新屋敷遺跡-A区-」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第140集
9. 埼玉県教育委員会 1994 「埼玉県古墳群詳細分布調査報告書」
10. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1996 「新屋敷遺跡-C区-」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第175集
11. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998 「新屋敷遺跡-D区-」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第194集

第190図 新屋敷遺跡古墳分布図



古墳群の分布の中心が、南側の生出塚古墳群へ移行したことに起因するものである。Ⅲ期の古墳は墳丘径12~14mの中型墳が主体を占め、Ⅰ期に比べ墳丘規模の縮小化が窺われる。しかし、これらの古墳は当該期では規模の大きな古墳であり、基本的には墳丘規模の大きなものに限定される傾向は共通している。

(2) 古墳出土土器

調査を実施した古墳は、すべて墳丘部が削平されていたため、主体部が検出されたものは小型墳の第51号墳から木棺直葬と推定される埋葬施設が確認されたにすぎない。また、周溝から石棺や横穴式石室に使用されたと考えられる石材等はまったく出土していないことから、主体部は木棺直葬系の埋葬施設が主流であったと推察される。このように埋葬施設の構造や副葬品等の内容等については明確でなく、古墳の築造年代の推定には、周溝内から出土した多数の土器や埴輪が基礎資料として、重要な拠り所となる。

また、新屋敷遺跡の調査成果のひとつとして、群馬県榛名山二ツ岳の噴火に伴い降下した火山灰（FA）が周溝内に良好な状態で堆積しており、古墳の築造時期や他地域との併行関係を検討する上で有効な示標テフラ層が検出されたことも、古墳の編年を行う上で好条件が揃ったと言えよう。

FAの降下年代については尾崎喜左雄博士の考究以来、遺構と火山灰層の関係を軸に、伴出する土師器や須恵器の型式編年から5世紀末から6世紀前葉の時間幅の中に比定されてきた。しかし、共存する須恵器型式の認識差や年代観の相違により、実年代については各研究者間で微妙な食い違いが認められ、必ずしも一致していないのが現状である。

ここではFAの降下時期に関して検討する用意が十分でないため、坂口一氏の説（坂口1993）を参考にしながら、新屋敷古墳群から出土した土器の変遷過程の中にFAの降下時期の問題も含めて検討したい。

各期の土器様相 新屋敷古墳群から出土した供献土器の主体を占める土師器環は、須恵器の坏蓋を模倣した

いわゆる模倣環が主流を占めている。また、出土した土器群の全体的な傾向として、古墳祭祀のために特別に作られた「精製土器」とでも呼べる、作りの非常に丁寧なものが多いのが特徴である。とりわけ模倣環は胎土が良撰され、体底部のヘラケズリ後、ナデミガキを入念に施した、光沢のある明橙褐色に焼き上げられている。このような古墳祭祀用の特別の器と言った性格上、環・壺などの特定の器種に偏りられ器種組成の問題については限界があり、さらに成形や調整が丁寧に仕上げられ、形態的特徴にも古い要素を強く残している可能性がある。そのため、必ずしも集落出土資料との整合性の認められない場合も少なくないことが、土器の変遷を考える上で前提条件となる。

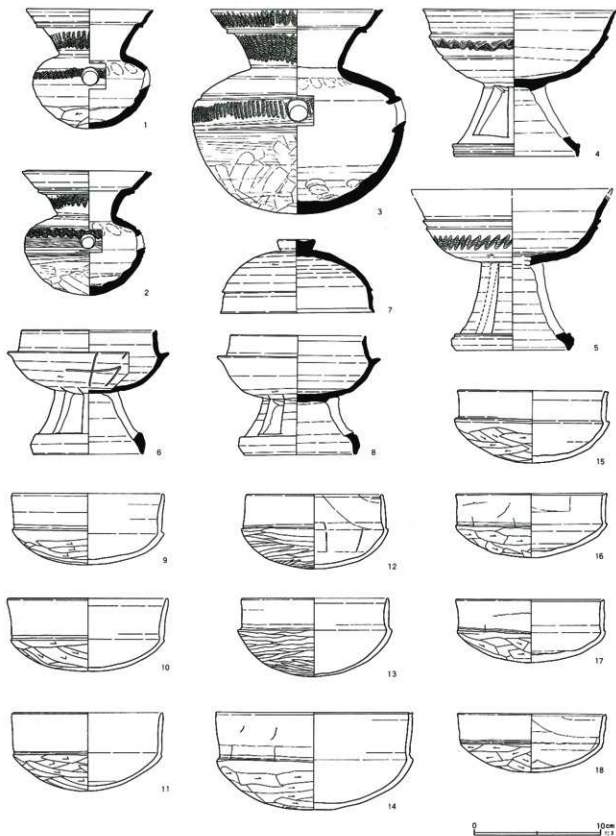
古墳から出土した模倣環の特徴や土器群の組み合わせの特徴により、Ⅰ~Ⅳ期に大きく時期区分することができる。このうちFA降下以前のⅠ期に位置づけられる古墳の数が最も多く、古墳群の形成が比較的短期間に集中して造営された状況が想定され、ここではⅠ期をa・bの2期に細分して、土器様相の変遷についてふれてみたいと思う。

Ⅰa期 古墳群の形成開始時期にあたり、帆立貝形前方後円墳の第60号墳を中心とする第44・46・57・58・63号墳のグループと、第4・35・49号墳のグループが形成される。この段階の環は、体部との境に段をもち口縁部が直立する模倣環と、内湾気味に口縁部に至る半球形の環に大別される。

模倣環には、口縁部が長く直立して立ち上がり、口唇部を丸くおさめた体部の深い形態のもの（第60号墳）と、口唇端部を丸くおさめ、口縁部が僅かに内湾気味に立ち上がるもの（第35・44・46・57・58・63号墳）の2形態が認められる。このうち第4号墳例と第35号墳例の一部には、口唇部に内傾する面をもつ模倣環が認められ、後出する要素が窺われる。

体部の内湾する半球形の環は内外面に赤彩を施し、第49・63号墳（第192図21~24）等から少量出土している。第49号墳例は口唇部を丸くおさめるものと、短く上方につまみ上げたものの2形態がみられる。これら

第191图 古墳出土主要土器



1. 第63号墳 2~5・9~11. 第60号墳 6~8・12~14. 第35号墳
15. 第28号墳 16~18. 第29号墳

は胎土中に片岩粒を含み、色調も黒ずんだものが多く、同様の特徴をもつ土器群が元荒川流域の大宮台地北部から埼玉地域にかけて散見される。

土師器の壺は口縁部に段をもつ大型壺が第35・60号墳から、口縁部の外反する大型壺が第35号墳から出土している。他に赤彩した小型壺が第35・49号墳から、須恵器の影響と想定される短頸壺(9)が第35号墳から出土している。直口壺は精製された胎土のもので、色調も模倣環と同じ明橙褐色を呈している。第35・63号墳から出土し、次期のものと比較すると胴部の球形化が特徴として指摘される。

土師器の甕は胴部の長胴化はさほど顕著ではなく、胴部外面にハケ調整を残すものが第58号墳から出土している。大型鉢は第35・60号墳から出土しているが、出土量は全体に少ない。

共伴する須恵器は、第60号墳から甕2・大型甕1、無蓋高環2、第63号墳から甕1、第35号墳から有蓋高環2等が出土している(35~41)。陶邑編年のTK23~TK47型式の特徴を備えたものと思われる。

最近の埼玉稲荷山古墳の発掘調査の成果によれば、定型化した模倣環の出現は5世紀後葉段階には確実であり、当該期の年代も稲荷山古墳の築造時期に近い5世紀後葉から末葉を中心とする時期に位置づけるのが妥当であろう。

Ib期 FA降下直前の土器群で、当該期に築造された古墳が最も多く、第26・28・29・40号墳例が指標となる。環の中にFAブロックが堆積していた第28・29号墳例が、FA降下直前の土器群の様相を示す基準資料である(63~65)。

この段階の特徴としては、前時期よりも環に数種類のバリエーションがみられるようになることがあげられる。模倣環は口縁部が直立し、口唇部端面に内傾する面をもつものが主流である。当該期を特徴づけるものとして口径が15cmを越す大振りの大型環が、第32・40・48号墳等から出土している(47・58)。また第48・65号墳からは口縁部の短く直立した有段の環(45・46・48)が出土し、胎土に白色針状物を含むことから、比

企系の模倣環が新たに組成に加わり始めたことが窺われる。このほかに第25・50・74号墳からは器肉の厚い、赤彩を施した口縁部の開く坏蓋模倣環(66~69)が出土している。また、第43号墳からは精製された模倣環(42・43)のほかに、口縁部の内傾する赤彩された環(44)が出土している。

土師器甕は第43号墳からハケ調整の胴部の長胴化傾向の甕と小型甕が伴出している。このほかに第43号墳からは、口縁部に段を有する大型壺が出土している。口径21.0cm、器高35.7cmを測り、胴部はヘラケズリを入念に施し、口縁部外面に段を有する。

Ia期と比較すると模倣環には形態差の少ないものが多く、さほど時期差を認めることは難しいことから5世紀末から6世紀初頭を中心とする時期に比定しておきたい。

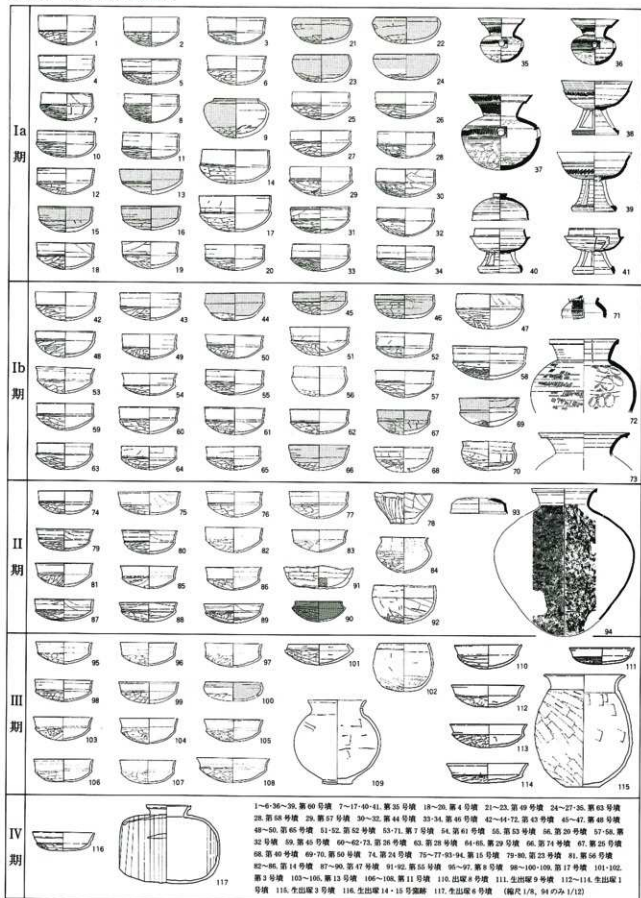
II期 第12・14・15・21・22・23・24・47・55・56号墳等が該当する。FA降下以後の土器群である。

模倣環の中には第15号墳例(75・77)のように前の時期の模倣環と判別し難いものが残存する一方、第24号墳例(74)のように口縁部が短く直立するものや、第14・23・56号墳例(79~83・85・86)のように口縁部が外傾して立ち上がり、体部の浅いものが主流を占めるようになる。また、当該期の後半段階には第47号墳例のように器面に黒彩を施し、須恵器の坯身を比較的忠実に模倣した口径の小さな坏身模倣環(90)や、口縁部が大きく外傾する、いわゆる小針型環に類似した特徴を有するもの(88・89)が出現しており、I期に比べると複数の系譜の異なる環が一定量認められるようになる。この他に第14・22号墳(84)からは土師器短頸壺が出土している。

年代的な位置づけに関しては第15号墳から須恵器の蓋(93)と大甕(94)が出土しており参考になる。蓋は口径12.2cm、器高3.3cmに復元され、口唇部内面の段が長く伸びた特徴をもち、MT15型式に併行する時期の所産と推定される。当該期の年代は6世紀前半を中心とする時期に位置づけられる。

なお、周溝覆土の観察からFAの降下時期は、Ib期

第192图 古墳出土土器編年図



とⅡ期の間に位置づけられる。須恵器型式ではFA層の下からTK47型式以前の特徴を示すものが出土する場合が多く、FAの降下時期は坂口氏が指述するようにMT15型式期の中に比定するのが妥当と思われる。しかし、最近の研究で問題とされているMT15型式のどの段階(坂本1996)に相当するかは、型式自体の捉え方や時間幅等の問題点が未解決であり、検討の余地がある。

Ⅲ期 新屋敷古墳群では当該期の古墳数は大きく減少し、生出塚古墳群奇りの第3・8・11・13・17号墳等から土師器環・埴等が出土しているにすぎない。

第17号墳からは口縁部が外傾して立ち上がり、口唇部端面に内傾する段を有する体部の浅い模倣環(98・99)と、口縁部がS字状に屈曲する偏平化した比企型環(100)が伴出し、Ⅲ期の中では古相を示す。第11号墳は前の時期の特徴を残す模倣環(106・107)と小針型環(108)が出土している。第3号墳からは須恵器の坏身を忠実に模倣した口縁部の内屈する坏身模倣環(101)と、整形の粗雑な深身の埴(102)が伴出している。坏身模倣環はⅡ期のものに比べると、口径が大きくなり体部も浅く、黒彩も施していない。

生出塚古墳群では第1・3・9号墳が当該期に位置づけられる。第1号墳からは口径17cm前後の口縁部が大きく外反して開き、体部の浅い小針型環(112~114)が出土している。また、第9号墳からは体部外面に棒状工具を用いてヘラ磨きを丁寧に施した、口縁部の外反する偏平な環(111)が出土している。

本期の資料には良好な須恵器の伴出例は認められないが、生出塚遺跡から埴輪が供給された想定される騎西町小沼耕地1号墳から、口径の大きな小針型環とTK43型式の特徴を示す須恵器器が出土していることから、6世紀中葉から後葉を中心とする時期に位置づけるのが妥当と思われる。

Ⅳ期 新屋敷古墳群内では、当該期の古墳は現状では確認されておらず、生出塚古墳群の第6号墳が代表例としてあげられる。主体部と推定される部分から河原石が多量に出土したことから横六式石室を主体部とす

る円墳と推定され、須恵器横瓶(117)が検出されている。また古墳出土資料ではないが、生出塚遺跡A地点14・15号窯跡出土の土師器の有段口縁環(116)、長胴甕、鉢等が当該期に位置づけられる。

年代は6世紀後葉から末葉を中心とする時期に比定される。

(3) 円筒埴輪

a. 第60号墳出土円筒埴輪の検討

第60号墳から出土した円筒埴輪は、古墳群の中では質量共に最も充実した内容を誇っている。円筒埴輪の大きな特徴は、口縁部に小円孔(副穴孔)を有し、器面に赤彩を施したものが主体を占め(A~E類、その他に銀杏葉文へう記号を有するもの(G類)、外面板ナデ調整で仕上げるもの(H類)、半円形の透孔を有するもの(I類)など少数の補助的な一群によって構成されている点があげられる。

ここでは本文中で記述した円筒埴輪分類を基にして、新たに形態・規格及びハケメ等の別の視点から大別を行い、本墳の埴輪生産に携わった工人集団の復元の糸口を探りたいと思う。

形態的特徴と規格 A・B類は各段の幅がほぼ均等な形態的特徴を示すことからI群として大別する。I群の法量は平均で口径23.8cm、器高38.7cm、底径13.4cmを測る。器高に占める各段幅の比率は、平均で第1段が35.8%、第2段が31.0%、第3段が33.2%で各段の幅がほぼ均等な値を示している。

一方、C・D・E・F1・F2類は、最上段の幅が他の段よりも長く、中間段の狭いプローションである。ただし、後述するように2cmあたりのハケメの本数がC類と他の類型では大きく異なるため、C類をⅡ群、その他をⅢ群として区分する。Ⅱ・Ⅲ群の法量は、平均で口径24.8cm、器高43.3cm、底径14.5cmを測り、I群に比して大型のものが多く、2条凸帯3段構成の円筒埴輪の中に大・小の2形態が存在していたことを示している。また、Ⅱ・Ⅲ群の器高に占める各段幅の比率は第1段が34.1%、第2段が27.8%、第3段が

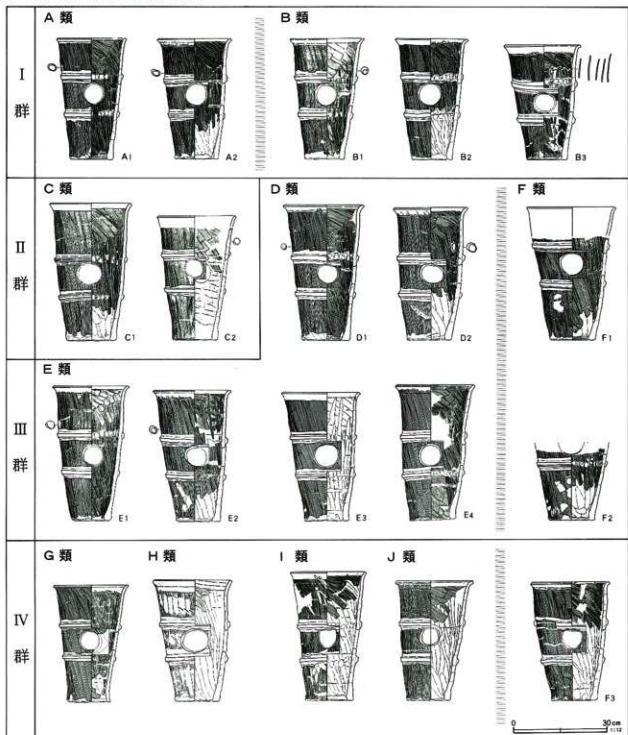
38.1%で、第1段：第2段：第3段の比率は1：0.8：1.1となり、凸帯の配置の指向性が、I群とは大きく異なっていることが分かる。

上記以外の円筒埴輪の類型については数量的に少ないことから一括してIV群として大別する。形態的な特

徴や、後述するへう記号の対応関係等からI～III群を製作した工人集団とは別系譜の工人（集団）による作品と想定される。

ハケメの分類 次に、形態的特徴に基づく大別とハケメの関係について検討したい。ハケメの本数は幅2cm

第193図 第60号埴円筒埴輪分類図



あたりのハケメの粗密を対象としたが、ハケメの凹凸の幅の違いによりある程度の誤差を含んでいることを予め断っておく。

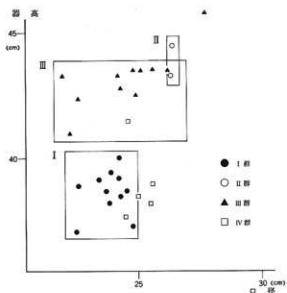
I群は、全体で8~14本/2cmとハケメの本数にばらつきが認められ、9・10本/2cmと13本/2cmの二つにピークが存在する。これにより少なくとも2種類以上の工具の使用が想定され、細別分類との対応関係が問題となる。しかし、今回の検討では同工品論的視点

からのハケメの分析を十分に行うことができず、個々の工具を特定することはできなかったが、今後はそうした視点からの検討が「工人集団を復元する有効な方法論のひとつと考えられる（犬木1995）。

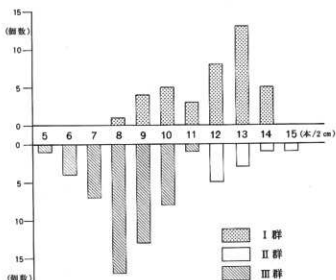
II・III群は、量的には近似した値を示しているものの、ハケメの検討では大きな差異が認められた。つまり、II群は12~15本/2cmと全体的に細かいのに対して、III群は5~11本/2cmとやや幅がみられるが、

第60号墳円筒埴輪分析表

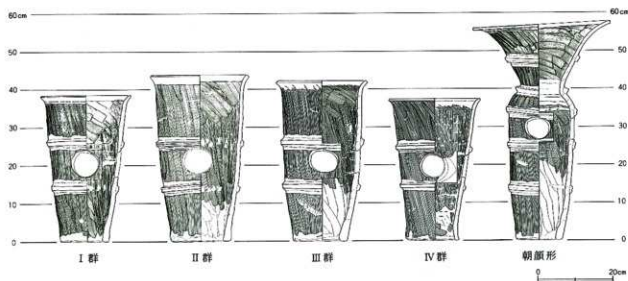
円筒埴輪の口径と器高



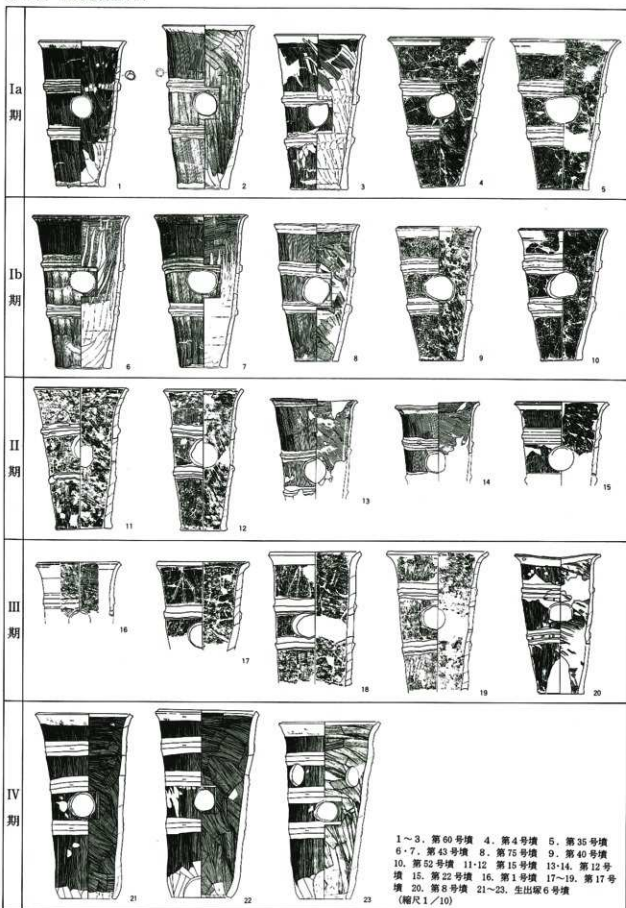
ハケメの本数



円筒埴輪の大きさ



第194図 円筒埴輪年図



円筒埴輪編年表

時期	古墳名	条数	1段目/器高(%) 平均(変位幅)	最上段/器高(%) 平均(変位幅)	対象 本数	備 考
I a	第60号墳(I群)	2	35.8(32.8-37.7)	33.2(30.5-37.8)	12	TK23-47
	第60号墳(II・III群)	2	34.1(31.7-36.0)	38.1(35.6-41.9)	13	
I a	第63号墳	2	34.0(33.2-35.2)	36.4(35.7-37.1)	3	TK23-47
I a	第58号墳	2	33.2(29.3-36.7)	36.0(32.4-39.1)	5	
I a	第35号墳	2	35.0(33.9-36.0)	32.7(29.7-35.7)	2	TK47
I a	第4号墳	2	34.5(33.2-35.9)	33.6(32.5-34.9)	3	
I b	第43号墳	2	36.6(33.2-41.2)	35.5(32.8-40.4)	10	
I b	第75号墳	2	36.6(35.6-37.6)	35.4(33.8-37.0)	2	
I b	第52号墳	2	38.6(36.1-40.0)	29.9(27.1-32.4)	3	
I b	第40号墳	2	39.5	30.2	1	
I b	第32号墳	2	39.0	32.8	1	
I b	第26号墳	2	-	-	-	
I b	第61号墳	2	-	-	-	
I b	第74号墳	2	-	-	-	
II	第15号墳	2	38.1(36.1-40.3)	28.6(25.5-30.9)	3	MT15
II	第12号墳	2	-	-	-	
II	第22号墳	2	-	-	-	TK10-MT85
III	第8号墳	2	42.1	24.8	1	
III	第17号墳	2	-	-	-	
III	第1号墳	2	-	-	-	底部調整あり

8・9本/2cmにピークが存在し、全体的に粗い工具を使用していることが判明した。これによりII群は形態的にはIII群に共通しているが、ハケメ工具はI群との類似性が窺われる中間的な一群として位置づけられる。I群とIII群との関係は、形態的な特徴の差異と工具の異同が良く対応しているが、副次孔や凸帯下沈線など共通の技術的な基盤があり、より複雑な様相を呈していることが予想される。

こうした器形のプロポーションや工具の異同が、埴輪を製作した工人集団や工人の出自の違いに起因するものであるのか、にわかに断言することはできないが、今後は円筒埴輪の属性分析の検討を基に、各類型ごとの定量的な分析操作から生産量の問題等も含めて工人集団及び生産体制の復元を検討すべき必要性を痛感している。

b. 円筒埴輪の変遷

生出塚遺跡を巡る円筒埴輪の編年の研究は、若松良一(1981)の研究を嚆矢として、飯塚武司(1984)、山崎武(1994)、塚原勇人(1996)等の先行研究がある。また埼玉古墳群の円筒埴輪の様相を整理した岡本健一(1997)の業績も、新屋敷・生出塚遺跡の円筒埴輪の

様相を理解する上で参考となる。

ここでは山崎氏の生出塚遺跡を中心とした円筒埴輪編年を軸に、各段幅の比率の変化に着目しながら時期的変遷について検討したい。なお、時期区分に関しては表現の繁雑さを避けるために、前項の古墳出土土器の編年案に対応させてI~IV期に区分し、さらにI期をa・bの2期に細分することにする。

Ia期 Ia期の中でもD区に所在する第58・60・63号墳の3基が、半円形透孔を残存することから古相を示す。このうち第63号墳が半円形透孔の比率が最も高く、円筒埴輪の主体を占めている。他方、第58・60号墳では特定の類型にのみ限定されており、時期差として把握される可能性もあるが、出土土器の検討からすれば、時期差として理解するよりも、より古い技法を保持した工人集団の系譜差として捉えられる方が妥当と思われる。

前述したように第60号墳から出土した円筒埴輪の各段の構成比は、均等配分に近いI群と、最上段のやや長い器形のII・III群に大きく二分される。第58・63号墳例も最上段の比率が36%前後で他の段幅よりも長い傾向がみられ、第60号墳II・III群に共通した形態

的特徴を示している。

次に、第4号墳例と第35号墳例は、漸移的な変化であるが既に最下段の伸長化の傾向が認められ、Ia期の中では新しく位置づけられる。透孔も円形透孔に統一され、赤彩や凸帯下沈線等の技法は明確でなく、技術系譜の相違を示唆している。色調は淡褐色及び橙褐色を基調とし、焼成の良好な製品が多い。また両者は孤線を組み合わせたヘラ記号に共通性が認められる。

当該期の年代は、出土土器の検討から5世紀後葉から末葉を中心とする時期に位置づけられる。

Ib期 当該時期は、第7・14・26・40・43・52・61・74・75号墳が該当する。外面に赤彩を施すものは、第43・61・75号墳で認められるだけで、大きく減少する。凸帯は断面台形ないしM字形で、透孔は円形に統一される。焼成も軟質の焼き上がりのものは少なくなり、硬質に焼かれたものが多い。色調は橙褐色系の第43・74号墳、淡褐色系の第35号墳、赤褐色系の第61号墳、乳白色系の第26・40・75号墳と古墳ごとに主体となる色調が異なり、同時に形態にもバリエーションが認められる。これらの点から、系譜の異なる複数の工人集団の関与が想定され、生出土塚遺跡の播磨期の様相を示している。年代的には、F A降下直前の5世紀末から6世紀初頭に位置づけられる。

II期 II期には低位面に展開する小支群内の第15・22号墳や、高位面の平坦部に位置する第12号墳など、I期の古墳の外縁部に埴輪樹立古墳の分布が拡散し、古墳群の主体が南側に移動する。

II期の中で古く位置づけられる第15号墳例は、平均で口径23.3cm、器高38.6cm、底径13.2cmを測り、I期よりも小型化及び細身化の傾向が窺われる。また各段の比率は、平均で最下段が38.4%、最上段が29.0%となり、最下段の器高に占める割合がI期に比べ増加している。第22号墳例は、全体の器形の分かるものはないが、最上段の幅が約10cm前後に縮小し、色調も明橙褐色に統一され、新しい様相が窺われる。

当該期にはまた底部調整技法の導入は認められないが、I期に比べると最下段の伸長化及び作りの粗雑・

簡略化の傾向が既に現れ始め、次期に確立される「生出塚系」円筒埴輪への移行期の様相を示している。

年代的には、F A降下直後から6世紀前半を中心とする時期に比定される。

III期 この時期には第1・8・17号墳が該当する。良好な資料に恵まれないが、第8号墳例は最下段幅の比率が器高の42.1%を占め、それに伴い最上段幅の比率も24.8%までに縮小している。この時期の大きな特徴としては、底部調整の導入が認められる。第1号墳例はIII期の中では新しい段階のもので、鴻巣市教育委員会による第1次調査時に最下段が長く伸び、板押圧による底部調整を施した円筒埴輪が出土している。また、第17号墳例は底部調整は認められないが、全体に器肉が厚いにもかかわらず、鮮やかな赤褐色に焼き上がり、前代に比べ焼成技法の習熟が想定される。

当該期の年代は、6世紀中葉から後葉を中心とする時期に位置づけられる。

IV期 新屋敷古墳群ではIV期の円筒埴輪を樹立した古墳の所在は現状では確認されていないが、生出塚古墳群には当該期の古墳の分布が確認されている。代表例として、3条凸帯の円筒埴輪を出土した第6号墳があげられる。この時期の小型の円筒埴輪の特徴は、最下段が器高の二分の一以上を占めるようになり、凸帯の低平化や底部調整など省力・簡略化が究極的に進んだ段階である。

時的には6世紀後葉から末葉を中心とする時期に位置づけられる。生出塚遺跡ではこの段階の埴輪窯跡の数が最も多く、近距離供給以外にも元荒川水系を利用して遠距離供給を活発に行い、生産体制の再編が図られたと推定されている。しかし、この時期を最後に埴輪生産は突然の終焉を迎える。

以上、簡単に新屋敷古墳群における円筒埴輪の変遷について素描してきた。今回の調査の大きな成果は、I期の円筒埴輪の様相が古墳ごとに形態的特徴や製作技法にバリエーションが認められ、単一の技術系譜としては捉えきれず、複数の技術系譜の集積として理解された点があげられる。それは第60号墳から出土した

円筒埴輪に、北関東地方との密接な関連性の窺われる「副次孔」や「銀杏葉文」ヘラ記号が存在し、他地域との活発な技術交流を背景に新旧の諸属性が錯綜した状態にあったことに端的に表されている。これはB種横ハケ調整の消滅以後、児玉・大里・比企・北足立地域等に一齐に展開した初期群集墳の築造に伴い、5世紀後半段階から埴輪生産の在地化が飛躍的な進展をみせたことを反映しているものと考えられる。

c. ヘラ記号

新屋敷古墳群からは、古墳ごとに特徴的なヘラ記号(線刻文)を有する円筒埴輪が数種類検出されている。円筒埴輪のヘラ記号の性格については、一般的に呪術的な意味合いを想定する場合と、窯印や製作者の仕上げ上の便宜的な「目印」等として位置づけられることが多い。しかし、ヘラ記号の施文される位置や形状によっていろいろな意味合いが込められていたことが予想される。また共通の意匠から特定の埴輪製作者集団の系譜を辿ることのできる例なども知られている。

そこで、各古墳ごとに円筒埴輪におけるヘラ記号の施文位置と形状を中心に概観し、ヘラ記号の性格等について検討したい。

第4号墳 Ia期後半に位置づけられる2条凸帯3段構成の円筒埴輪を出土している。ヘラ記号は2本の横線で横向きのV字形を描き、それに交差するように3ないし4つの山をもつ左上がりの波状文を描いた特徴的なものである(第195図17)。円筒埴輪A類に主体的に認められ、破片資料も含めるとかなりの個体に描かれていたものと推定される。

このヘラ記号の施文位置は、すべて最上段外面の透孔直上から描き始めており、透孔を正面とする約束事が存在したことを示唆している。おそらく呪術的な意味合いをもって描かれたのであろう。文様の基本的構成は共通しているが、波状文の描き方に個人のクセが描出されており、複数の工人の間で共通の記号として認識されていたものと想定される。

第8号墳 III期前半の円筒埴輪で、ヘラ記号を有するものが3点出土している。第195図1は第2段外面の

透孔脇に段間いっばいに大きく描かれた×印のヘラ記号を有し、刀子状の鋭利な工具によって描かれている。第195図2は最上段外面の透孔直上付近に○印に横棒1本を重ねた特徴的なヘラ記号が、棒状工具を用いて描かれている。もう1点は小片のため不明である。

第12号墳 II期の円筒埴輪で、第2段外面の透孔右脇に上向きの矢印が大きく描かれている(第195図3)。同じ矢印のヘラ記号は、B区第15・17号墳でも認められるが、それらは最上段外面の透孔直上付近に描かれており、施文位置が異なる。

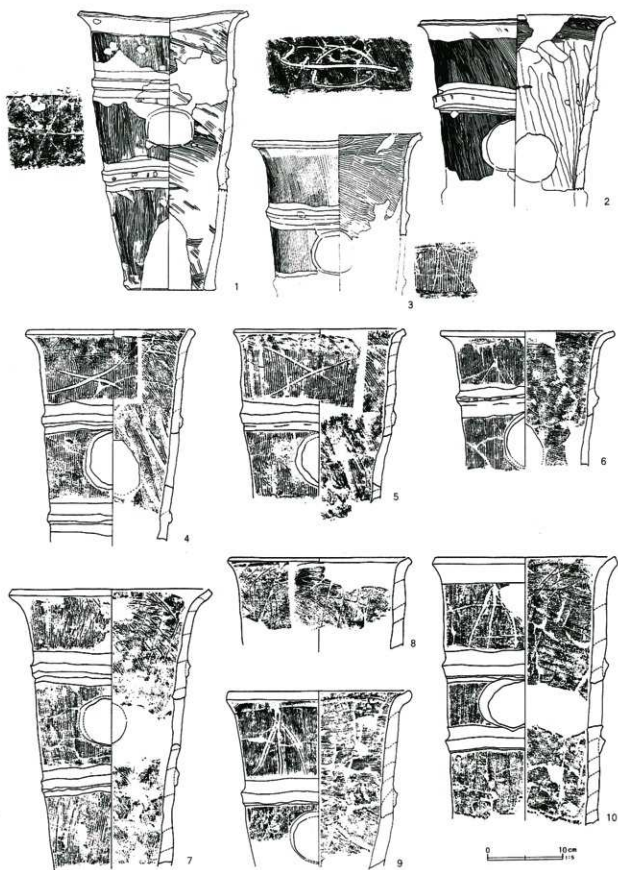
第15号墳 埋没谷の南東側低位面に分布する古墳の中では、最も内容の充実した形象埴輪群を出土したものである。円筒埴輪はII期前半の典型で、ヘラ記号をもつものは破片を含め総数48点を数える。すべて外面に描かれ、最上段透孔直上付近に描かれた上向きの矢印2点の他は、すべて最上段外面の透孔直上付近に大きく描かれた×印のヘラ記号である。

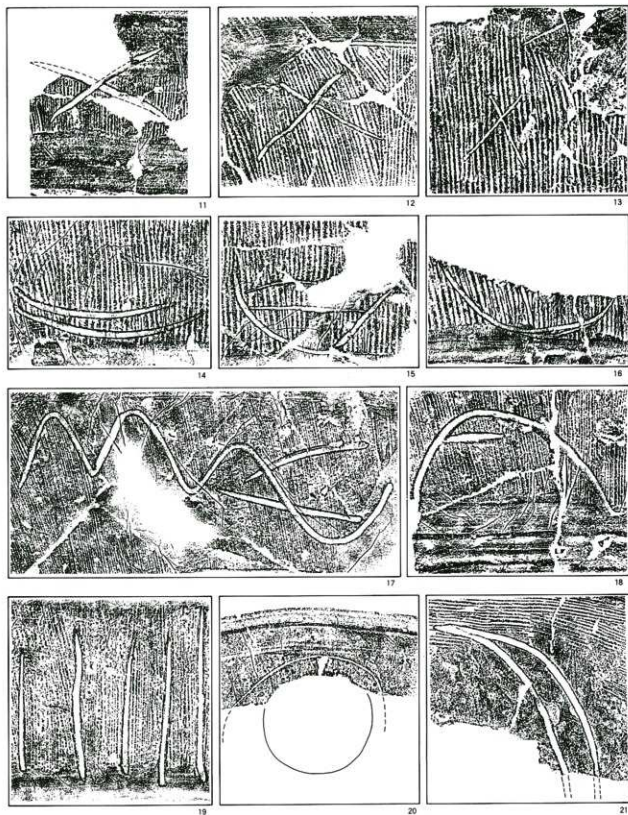
矢印のヘラ記号は、円筒埴輪の分類で(B)とされたハケメの細かき一群に限られ、ブリッジの左脇に意図的に配列されていたと想定されている(第195図6)。なお、矢印のヘラ記号は、形状は若干異なるが、施文位置や施文工具の同一性から同一工人によって描かれた可能性が大きい。

また、×印の方は円筒埴輪の分類で(C)、(D)とされたハケメの粗い一群に特徴的に認められ、埴輪列のほぼ全域から出土している(第195図4・5)。ヘラ記号の施文順序等に異同が認められることから複数の工人によって描かれたものと推定される。

第17号墳 III期の特徴を示す2条凸帯の円筒埴輪と多条凸帯の大型円筒埴輪が出土している。ヘラ記号は2条凸帯の円筒埴輪の最上段外面の透孔直上や左寄りに上向きの矢印のヘラ記号(第195図9・10)が3点と、内面口縁部寄りに格子状のヘラ記号(第195図7・8)が破片を含め8点確認されている。

また、大型円筒埴輪の内面にも指ナデによる斜条線が認められるが、ヘラ記号とはやや趣が異なり、通常のヘラ記号とは区別される。





1·2. 第8号墳 3. 第12号墳 4~6. 第15号墳 7~10. 第17号墳
 11·12. 第52号墳 13~16. 第35号墳 17. 第4号墳 18. 第40号墳
 19. 第60号墳 20. 第61号墳 21. 第63号墳

第22号墳 II期の円筒埴輪としては新しい様相を示すものである。第2段外面に×印のヘラ記号を有するもの3点、外面に逆V字形のヘラ記号を有するもの1点、外面に波状文を描いたもの1点、内面に3条の斜条線を有するもの1点など多様であるが、いずれも破片資料のみで、詳細については不明である。

第26号墳 Ib期に位置づけられる円筒埴輪が出土している。ヘラ記号を有するものは9点出土しているが、施文位置や形状の判明するものは少ない。最上段外面に描かれた逆U字形のヘラ記号が認められ、施文位置は透孔から約90°ずれている。このヘラ記号は第40号墳出土例に類似しており関連が認められる。

第35号墳 Ia期の円筒埴輪を出土した古墳で、数種類のヘラ記号が認められる。共通した特定のヘラ記号はないが、弧線を中心としたバリエーションが本墳の特徴である。

ヘラ記号について全体の形状の分かるものは少ないが、施文位置は最上段外面の透孔真上か、その付近に描かれたものが多い。ヘラ記号の種類は×印を縦に二つ並べたもの(第195図13)、横方向の弧線を1本描いたもの、横方向の弧線を2本描いたもの(第195図14)、U字形の中に横線を2本描いたもの(第195図15)、U字形の中に縦線を1本描いたもの(第195図16)、縦線を3本描いたものなど多種多様であり、他の古墳が共通した記号を採用する場合が多いのに対してやや異質である。U字形と横線の組み合わせなど、第4号墳のヘラ記号に共通した要素が窺われる。

第40号墳 Ib期の円筒埴輪を出土し、ヘラ記号を有するものが3点認められた。そのうちの1つは最上段外面に逆U字形が描かれている。その他は小片のみで全体の形状の分かるものはない。

第52号墳 Ib期に属する円筒埴輪を有し、ヘラ記号は破片資料を含め15点が確認された。最上段外面の透孔直上より少し左にずれた位置に×印を描いたもの(第195図11)、同じ最上段外面でも透孔の真上から約90°ずらした位置に×印を描いた(第195図12)ものがある。前者は円筒埴輪A類に限定され、施文の特徴か

ら同一工人によって描かれた可能性が大きい。

第60号墳 Ia期に位置づけられる副次孔をもつ円筒埴輪が多量に出土している。ヘラ記号は、A-Eの5種類に大きく分けられる。

ヘラ記号Aはいわゆる「銀杏葉文」のヘラ記号を有するものである。透孔右側に描き、一方の透孔にのみ施文するの原則である。施文方法には刀子状の工具を用いて細線で描いたものと、棒状工具によって描いた2種類がある。図示しなかった破片等を含めると20点以上を数え、円筒埴輪総体の中である程度の割合を占めていたと推定される。

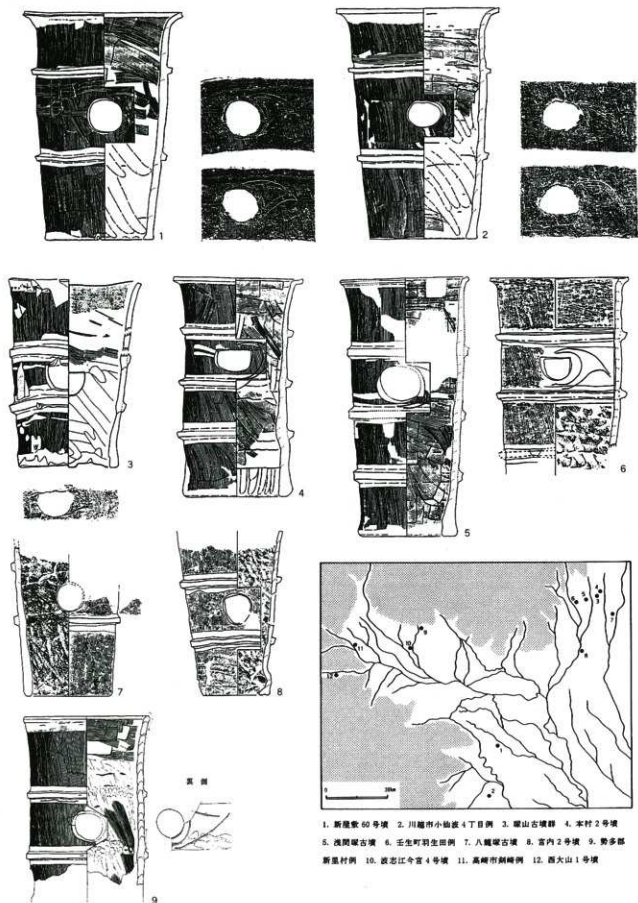
「銀杏葉文」ヘラ記号の分布は栃木県の宇都宮市・壬生町を中心とした県中部から県南部にかけて濃密に分布しているほか、群馬県西部及び埼玉県中央部にも数例確認されている(第196図)。外面調整に二次調整の横ハケを伴う段階から、一次調整縦ハケのみに変化する時期に盛行し、ヘラ記号自体も二重に描かれたものから一重のものに省略が行われたことが指摘されている(水沼1990)。本例は栃木県内の諸例と比較すると、透孔脇に直線によって三角文を描いており、やや様相が異なるが(秋本1989)、工人集団の系譜関係を示唆するものとして注視される。

ヘラ記号Bは近接する第61号墳に特徴的な透孔の周りに描いた円文を有するもので、第61号墳からの混入と思われる。ヘラ記号C(第195図19)は最上段外面に5条の縦線を描いたもので、透孔直上から約90°ずれた位置に施文され、破片を含め5点しか出土していない。ヘラ記号Dは内面に描かれた斜条線で、破片が多く条数については明確でないが、最多で7条を数える。施文工具に違いがみられ、複数の工人に共通した文様

第196図 銀杏葉文ヘラ記号集成

- 1・2. 浅間塚古墳
3. 宮内2号墳
4. 射撃場内埴輪
5. 塚山西古墳
6. 壬生町羽生田例
7. 八龍塚古墳(以上栃木県)
8. 波志江今宮4号墳(群馬県)
9. 川越市小仙波4丁目例(埼玉県)

第196図 銀杏葉文へら記号集成 (S=1/8)



と指摘できる。ヘラ記号Eは小片にヘラ記号の一部を残すものを一括した。

なお、本墳の円筒埴輪を特徴づける副次孔を有するものにヘラ記号がまったく認められないことは、副次孔の性格にヘラ記号と等質的な側面一帯的性格があることを物語っていると見えよう(南雲1987)。

第61号墳 Ib期に位置づけられる円筒埴輪が少量出土している。ヘラ記号は透孔の周りに細線で円文を描いたもので、両方の透孔に線刻を入れているようである(第195図20)。また外面調整には板ナデ調整のものと、縦ハケ調整のものが認められることから、複数の工人により共有されたヘラ記号と考えられる。

第63号墳 Ia期の古墳のうちでも最も古い一群に属する円筒埴輪を出土している。半円形透孔を有する円筒埴輪A類の最上段部分の内面に鱗状の特徴的なヘラ記号が認められる(第195図21)。ヘラ記号は縦位の2本の弧線を三日月状に組み合わせたものである。東松山市下道添1号墳から同一のヘラ記号をもつ円筒埴輪が出土しており、比企地域の円筒埴輪との系譜関係の窺われる資料として、注目される。

第75号墳 Ib期の円筒埴輪を少量出土し、ヘラ記号は外面調整に板ナデ調整を施したものに確認された。施文位置は、最上段外面の透孔真上から少しずれたところで、弧線状のものが描かれていたようである。

以上、各古墳のヘラ記号について、形状、施文位置、施文方法を中心に検討を加え、ヘラ記号と円筒埴輪分類との相関関係や、描き手の問題、類型等についてふれてきた。そこで、これらの視点を踏まえ古墳ごとのヘラ記号の様相について簡単にまとめてみたい。

- A相** 単一のヘラ記号を複数の工人が共通して描く
(第4・52・61・63号墳)
- B相** 数種類のヘラ記号を、単一工人がそれぞれ描く
(第8・15・17・35・60号墳)
- C相** 限定的な施文 (第12・26・40号墳)
- D相** ヘラ記号を施文しない (第43・58・74号墳)

このように各古墳ごとのヘラ記号の様相は多様であり、ヘラ記号の形状や施文位置等による画一的な意義

づけは困難であることから、別の機会に詳細な検討を試みたいと思う。しかし、B相の古墳に認められたヘラ記号のパリエーションは、複数の製作地から供給されたことを短絡的に示すものではなく、単一の製作地における埴輪生産が定型化する以前の様相を示すものと理解するほうがより当を得たものと考ええる。それは、一つの古墳の埴輪の胎土、焼成等の均一性からも裏づけられ、生出土埴輪窯跡群の成立期の様相に関わる問題について解明の糸口を提供している。

(4) 石製品

a. 紡錘車

新屋敷古墳群では、今までの調査で19基の古墳から23点の紡錘車が出土している。出土古墳の割合は全体の25%を占め、当古墳群では普遍的に出土する遺物のひとつと言っても過言ではない。しかし、このように周溝から紡錘車が出土する例は必ずしも多くはない。県内では隣接する生出土塚1号墳をはじめ、東松山市古凍根岸裏遺跡、蓮田市椿山3～5号墳、草加市蛸蛇遺跡古墳跡、浦和市白飯宮腰遺跡第2号円形周溝墓等で紡錘車が周溝から出土している。

これほど多くの紡錘車が出土した古墳群は類型かほとんどなく、同一水系に属する椿山古墳群のみが比較的近似したあり方を示している。このように送葬儀礼において紡錘車を納置する儀礼行為が存在したことが、当古墳群の大きな特徴のひとつとして指摘される。

形態分類 出土した紡錘車の形態は、板状のものや算盤玉形のものではなく、截頭円錐形ないし台形状のものばかりである。断面形態を中心に形態分類を行うと以下のように区分される。

- A1類** 側面上部に明瞭な端面を作り出すもの
- A2類** 側面上部に端面を作らず、断面逆台形のもの
- B類** 狭面径が小さく、断面三角形に近いもの
- C類** 狭面径が大きく、断面逆台形のもの
- D類** 偏平な作りのもの
- E類** 断面半球形のもの

A類はA1類が8例、A2類が9例と合計17例が出

土し、全体の74%を占めている。他のものはB類2例、C類1例、D類2例をそれぞれ数える。

材質 紡錘車の材質は第60号墳から陶質（須恵質）のものが2点出土しているほかは、すべて滑石製のものである。第60号墳出土の陶質紡錘車は稀少であり、硬質の焼き上がりや精選された胎土等から搬入品の可能性も考えられる。また滑石の色調には濃緑色のものから乳白色に近いものまで大きな幅があり、複数の製作地から供給されたものと推察される。

線刻 紡錘車に線刻が描かれたものが6例出土している。その代表的なものを紹介すると、後述するように第58号墳例は線刻画を描いた紡錘車である。第39号墳例は鋸歯文の中を綾杉文で充填した幾何学文様を線刻していた。第61号墳例は烈点文と条線を刻む。この他の例も全体に作りか丁寧で、側面の整形痕も細かく繊細で、使用痕を残すものは少ない。実用品としてよりも仮器としての性格が強いようである。

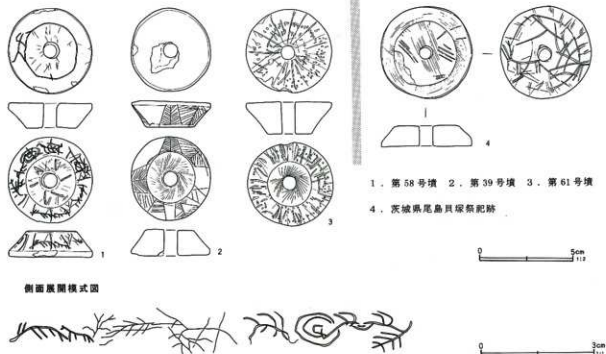
出土状況 出土位置はブリッジの開口する周溝南側から西側にかけて出土し、それもブリッジの右側から出土した例が圧倒的に多い。また円墳では第49号墳のブ

リッジの両脇からそれぞれ1個ずつ出土したほかは、いずれも1古墳1個のみである。ただし、第60号墳は例外で、周溝から4点の紡錘車が出土している。このうち紡錘車aはU字形刃先と伴出しているが、他の3点は単独で周溝覆土中から出土した。

伴出遺物 伴出遺物としては土師器環と共伴した例が最も多く13例を数える。饗応儀礼に使用された土器類と共に周溝内に配置されたこと示している。また鉄製品が伴う例も少数ではあるが認められる。第4・61号墳では刀子が、第58号墳では毛抜き形鉄製品が、第60号墳ではU字形刃先との伴出が確認されている。

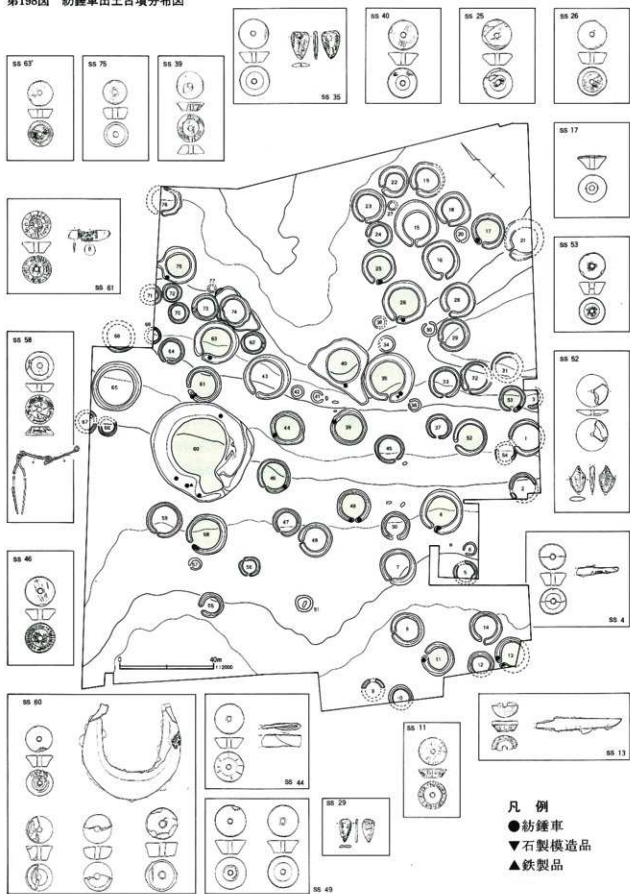
時期 時期別の紡錘車出土古墳の推移は、I期の古墳が最も多く16基あり、II期2基、III期1基と減少する傾向が窺われる。出土古墳の様相も大型墳に限定される訳ではなく、10m前後の中・小型墳からも出土している。分布の傾向として大きな偏在性は認められないものの、2～3基ごとにグルーピングできる可能性が残されている。しかし、現状の分布をみる限りでは継続的に築造された特定の単位群に特徴的な葬送儀礼としての位置づけは困難な状況にある。

第197図 紡錘車集成



側面展開模式図

第198図 紡鐘車出土古墳分布図



紡錘車出土古墳一覧

番号	古墳名	形態	外径(cm)	厚さ(cm)	出土位置	共存遺物	押印番号	備考
1	第4号墳	A1	4.2	2.0	周溝西側/ブリッジ右	土師器環3、刀子1	第115図13	二分割
2	第11号墳	A1	4.4	1.4	周溝西側/ブリッジ右		第25図4	上・側面放射状線刻
3	第13号墳	A1	4.1	1.7	周溝西側/ブリッジ左	土師器環1	第33図6	1/2欠損 底面縦線刻
4	第17号墳	B	4.6	2.2	周溝西側/ブリッジ左	土師器環1	第41図5	
5	第25号墳	A1	4.7	1.9	周溝南西側/ブリッジ右	土師器環1	第137図2	
6	第26号墳	A2	4.6	1.8	周溝南西側/ブリッジ右	土師器環4	第142図10	
7	第35号墳	A2	4.7	1.7	周溝南側/ブリッジ右	土師器壺1・短頸壺1、 須恵器高坏2	第170図40	
8	第39号墳	A1	4.2	1.4	周溝北側	土師器環3	第183図6	側面鋸歯文線刻
9	第40号墳	B	4.8	1.9	周溝南西側		第187図9	
10	第44号墳	A2	4.7	1.6	周溝西側	土師器環4	第199図7	側面放射状線刻
11	第46号墳	A1	4.8	1.7	周溝南西側/ブリッジ右	土師器環3	第203図7	
12	第49号墳a	A2	5.0	2.0	周溝南側/ブリッジ右	土師器環2	第209図6	
13	第49号墳b	A2	5.0	2.2	周溝南側/ブリッジ左	土師器環1・壺2	第209図7	
14	第52号墳	D	(5.1)	(0.6)	不明		第217図6	
15	第53号墳	A2	4.3	1.9	周溝南側/ブリッジ右	土師器環1	第223図12	
16	第58号墳	A1	4.5	1.3	周溝南西側/ブリッジ右	毛抜き形鉄製品1	第69図7	線刻画
17	第60号墳a	A2	4.3	1.8	周溝南西側/括れ部西	U字形刀先1	第99図59	
18	第60号墳b	A2	(4.3)	2.3	周溝南西側/後円部西		第99図60	1/2欠損
19	第60号墳c	E	4.5	2.1	周溝南西側/前方部前面		第99図61	1/2欠損 陶質
20	第60号墳d	C	5.0	2.3	周溝東側/後円部東		第99図62	陶質
21	第61号墳	A1	4.5	1.7	周溝南西側/ブリッジ右	土師器環1、刀子1	第132図2	上・側面線刻
22	第63号墳	A2	4.1	1.4	周溝西側/ブリッジ右	土師器環3・直口壺1、 須恵器壺1	第144図15	
23	第75号墳	C	3.9	1.8	周溝西側		第175図4	

紡錘車形態分類



b. 第58号墳出土線刻画紡錘車

第58号墳から出土した紡錘車の各面にはそれぞれ特徴的な文様が描かれている。上面には大きく脚を開き右手を上にあげた人物(?)と円孔の周りに円文を線刻している。この人物は左手に弓らしきものを手に持った表現がみられる。側面は大小二頭の四脚動物を中心に、木葉文や渦巻文等の抽象文様が描かれている。さらに下面には6本の放射状文を深く刻んでいる。

側面に描かれた二頭の動物は1本の線で抽象的に表現され、左側の大きな方は立派な角をもつことから雄鹿を表したものと想定される。しかし、右側の方は小さくて角の表現がないことから、雌鹿か、あるいは仔鹿を描いたものと想定されるか判断はできない。

紡錘車に「鹿」を描いた類別には、茨城黒尾島貝塚

祭祀跡出土例(第197図4)が知られるだけである。このほかに古墳時代における「鹿」を描いた類別には、栃木県塚山古墳群出土の円筒埴輪に描かれた「雌雄の鹿」が著名である。県内では大宮市東宮下から鹿と弓を線刻した人物埴輪が出土している(辰巳1992)。

紡錘車に描かれた二頭の「鹿」と木葉文及び渦巻文等の抽象的文様の意義について明確にすることはできないが、弥生時代以来、鹿は神の使いとしての神聖なる靈獣と考えられていたことから、聖なる空間としての古墳へ邪霊の侵入を防ぐために一僻邪一、あるいは死者の再生や復活一魂振りーを願って描かれたものと推察される。

c. 滑石製模造品

紡錘車以外にI期の第29・35・52号墳から剣形模造

埼玉県内出土鈴鏡一覧

番号	遺跡名	所在地	鏡式名	遺存度/面径	伴出遺物	所産・保管者	文献
1	新屋敷60号墳	鴻巣市東4丁目	不明	破片/復元径8.0cm	土師器、須恵器、紡錘車、鉄鎌、鉄刀、U字形刀先、埴輪	埼玉県立埋蔵文化財センター	1
2	炭塚(カネツカ)	東松山市大字大谷	六鈴五獣形鏡	完形/約10.9cm		不明	2
3	三千塚古墳群	東松山市大字大谷	五鈴鏡	不明		松山高松記念館旧蔵	3
4	伝生野山古墳群	見玉郡見玉町大字見玉	十鈴五獣鏡	完形/19.5cm		長瀬総合博物館	4
5	不明	見玉郡神川町大字新里	五鈴孔文鏡	不明		メトロポリタン美術館	2
6	舟木山下	大里郡大里村大字甲山	六鈴鏡	不明	土師器、須恵器、鉄鎌、石製模造品(滑石製鏡・滑石製勾玉・滑石製紡錘車)	不明	5

文献

- 1 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998「新屋敷遺跡-D区-1」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第194集
- 2 後藤守一 1926「漢式鏡」雄山閣
- 3 岡崎 敬 1978「日本における古鏡発見地名表 関東地方」
- 4 田中 琢 1979「古鏡」日本の原始美術8 講談社
- 5 稲村垣元 1951「埼玉縣史」第1巻 埼玉県

品が各1点ずつ出土している。小型のものが多く、鋒の表現も形態化し、偏平な作りとなり、石製模造品としては新しい様相を示している。いずれも周溝覆土の上層から出土していることから、紡錘車のように供獻土器と一緒に周溝底面に最終的に置かれることはなかったようで、送葬儀礼において異なった使用状況(祭祀形態)が想定される。

(5) 金属製品

a. 銅製品

鈴鏡 第60号墳の前方部寄りの南東側周溝から鈴鏡の破片が出土した。鈴をひとつだけ残した小さな破片であるため、鈴の数や鏡式等については不明である。面径約8.0cmに復元される小型鏡で、第97図の復元図では鈴鏡の中で最も出土例の多い五鈴鏡として図示したが確たる根拠はない。また周溝覆土中から出土したため意図的に破壊されたものなのか、あるいは墳丘の崩落に伴い、埋葬施設から副葬品が混入したものであるのか断定することはできない。

県内における鈴鏡の出土例は伝承品を含め6例が知られているが、伴出遺物について確実なものも少なく、出土古墳の築造時期について明確なものはほとんどない(国立歴史民俗博物館1994)。

b. 鉄製品

武器 武器は第60号墳から鉄刀片2点、鉄鎌1点が周溝覆土から出土している。鉄刀は刀身と茎の破片がある。刀身部の破片には軸木の木質部分が付着していた。茎の破片には目釘穴が開いている。鉄鎌は両丸造長三角形鎌である。逆刺のない撫角状のもので、頸部以下を欠失している。

U字形刀先 第60号墳から出土したU字形刀先は、丸みを帯びたU字形の強い外形で、最大幅を中位にもつ。刃幅は広く、耳部に向かって徐々に幅を減じ、両方の端部を内側に折り返して木製柄に装着したものと思われる。最大幅15.6cm、最大高15.0cm、風呂受部最大幅9.7cm、最大高10.8cm、Y字形溝の断面幅約0.9cm、深さ約1.7cm、厚みは0.2cmを測り、U字形刀先としては中型品に属する(松井1987)。

西側削れ部の供獻土器から少し西に離れた、周溝底面に刀先を南東に向けて、ほぼ水平に置かれていた。紡錘車と共伴し、出土レベルがほぼ同じであることから同時に置かれたものと思われる。出土状況の検討からすれば周溝内に破損品を破壊・放棄したものとは考え難く、送葬儀礼に伴う何らかの祭祀行為に関連した使用具の意図的な納置(祭具の供獻)と位置づけられよう(田中1994・1995)。

さて、県内における古墳時代のU字形刃先の出土例はあまり多くはなく、他の鎌などの鉄製品農具に比べると絶対量が少なく、集落への普及のあり方も異なり、所有・管理形態が規制されていたのではないかと指摘されている(金子他1994)。和泉期の川越市御伊勢原遺跡59号住居跡出土の馬蹄形に近い形態のものが最も古い例で、後続する鬼高I式期では、本庄市下田遺跡6号住居跡、同社具路遺跡93号住居跡等があげられる。また古墳出土例としては、横穴式石室を主体部とする蓮田市ささら1号墳から、西周溝中央の底面に刃部を立てた状態でU字形刃先が出土しており、7世紀代における直立埋納の例として注目される。

鎌 第60号墳から鎌の柄の装着部と考えられる折り返し部の破片が1点出土している。

刀子 古墳から出土した鉄製品の中では刀子が最も多く、8基の古墳から合計11点が確認された。先述したように紡錘車と伴出した例が、第4・61号墳で確認されている。両例とも刀身部に欠損することから、故意に破砕・変形を行った可能性も想定されるが明確でない。しかし、第4号墳からは切先を意図的に折り曲げた刀子が出土しており、送葬儀礼に伴う破砕・変形行為の可能性を示唆している。

毛抜き形鉄製品 第58号墳から線刻画紡錘車とともにいわゆる毛抜き形鉄製品が出土した。

身の片方を欠損するが、つまみ部から肩部にかけての屈曲が緩く、肩部の張りの少ない形態で、穴戸氏のA型(穴戸1984)、宇野氏のIIa型(宇野1985)に該等する。頭部に円環金具を介して2連のS字状金具が連結する。錆化のため明確ではないが一方のS字状金具の中央にはひねりを入れているようである。毛抜き形鉄製品にS字状金具を連結した例として、山口県朝田1号墳、大分県十六山横穴墓、福岡県高島古墳、神奈川県上依知1号墳、群馬県丸山古墳等が知られる。S字状金具の形状から推して、何かに吊り下げられていたものと想定されるが、その用途については鋸子、刀子の腰佩具、釵子等の諸説があり判然としない。

また県内における古墳出土例は、行田市埼玉稲荷山

古墳、杉戸町目沼9号墳、美里町猪俣南19号墳、神川町城戸野4号墳、川本町見目1号墳・鹿島13号墳の6例が確認されている。形態的には稲荷山古墳出土例に類似している。

不明鉄製品 この他に第59号墳から表面に布が付着した鈎金具と推定される小片が出土している。また第60号墳から挂甲の小札に形態的に類似した板状の鉄製品が出土しているが、性格及び用途は不明である。

(6) 今後の課題

a. 埼玉古墳群との関連

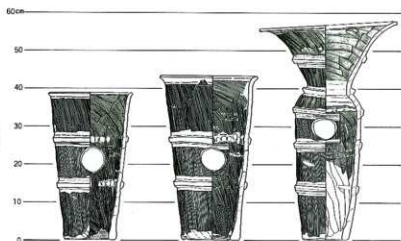
今までの調査成果を基に新屋敷古墳群の様相について検討を行ってきた。その結果、遅くとも5世紀後葉には古墳群の形成が開始され、500年前後する時期に最も多くの古墳が集中して築造された、いわゆる初期群集墳としての位置づけが明確となった。さらに6世紀前半から後半にかけては南側に隣接する生田塚古墳群に分布域を拡大しながら展開していく古墳群の動態の一端が明らかにされた。

このように生田塚・新屋敷古墳群が造営された時期は、まさしく埼玉古墳群の成立と展開にオーバーラップしている。稲荷山古墳の築造を契機として、埼玉古墳群内部に梅塚古墳をはじめとする小円墳群が営まれた現象に呼応するように、周辺地域にも熊谷市中条古墳群、行田市齊条古墳群・若小玉古墳群・若王子古墳群等の小円墳を主体とする群集墳が築造されはじめ、埼玉政権を支える政治的地域集団が形成された。おそらく生田塚・新屋敷古墳群もその一翼を担っていたものと推察される。とりわけ古墳群は背後に生田塚埴輪窯跡群がひかえていることから、埴輪生産の直接的な管掌者集団としての性格が色濃く、埼玉古墳群との密接な関連が指摘されている。

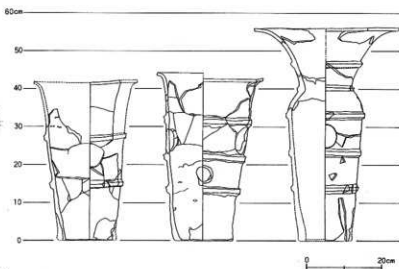
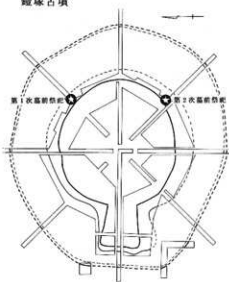
また、I期の盟主墳として位置づけられる全長42.5mの新屋敷60号墳は、熊谷市中条古墳群に所在する全長43.8mの帆立貝形前方後円墳、鏝塚古墳と同一の規格で設計された同規模墳の可能性が高い。出土した土器の様相から築造時期もほぼ同時期と想定されること

第199図 新屋敷60号墳と鐘塚古墳

新屋敷60号墳



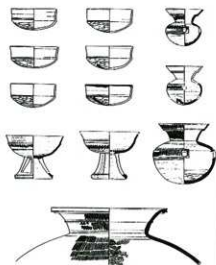
鐘塚古墳



0 20m 1:1000

0 20cm

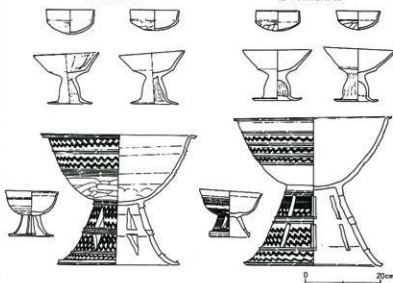
新屋敷60号墳



鐘塚古墳

第1次墓前祭祀

第2次墓前祭祀



から、埼玉政権による造墓規制を受けた新興勢力の中小首長墳として位置づけられる(寺社下1986)。

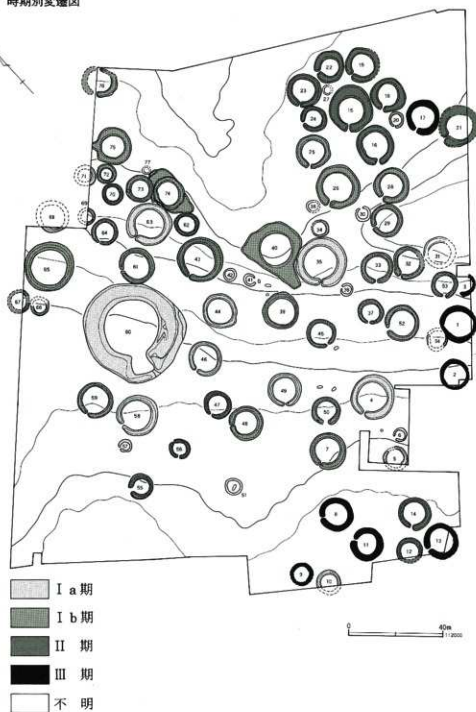
b. 埴輪の生産と供給

生出塚遺跡における埴輪生産の開始時期は、現状ではI期に遡る確実な窯跡は確認されておらず、II期の第32号窯跡や工房跡出土例が最も古く位置づけられ

ている。しかし、新屋敷古墳群のI・II期の様相からすれば、他地域との技術的な交流を背景としながらIII期以降に展開する「生出塚」系円筒埴輪への系譜関係を辿ることができ、I期段階まで操業時期が遡ることは間違いないものと思われる。

しかし、新屋敷古墳群の形成と同時に埴輪窯の操業

第200図 時期別変遷図



が開始されたのか、現状ではその可能性は十分に考えられるものの推断することは困難である。円筒埴輪の形態及び技法の変化の方向性や肉眼観察による胎土の特徴は、生出土塚窯の製品の範疇から大きく逸脱しておらず、さらには埴輪の運搬の便なども考慮するならば、近傍に未発見の埴輪窯が存在する蓋然性は大きい。だが、現状では元荒川流域、あるいは大宮古地対岸の馬宝埴輪窯跡群等も含めたより広い範囲を考慮した上で、供給窯を同定していく作業が大きな課題として残

されている。

以上、新屋敷古墳群を巡る諸問題について、出土遺物を中心に瞥見してきた。そこから派生する埼玉古墳群や生出土塚遺跡との関連性については、若干の問題点を指摘するにとどまり、今後大きな課題を残してしまった。また、形象埴輪の問題等についてはまったくふれることができなかった。これらについての詳細な検討は別の機会を期したいと思う。

参考文献

- 秋本隆光 1989 「八龍塚古墳」上三川町埋蔵文化財調査報告第9集 上三川町教育委員会
飯塚武司 1984 「北武蔵における埴輪生産の展開」『法政考古学』第9集 法政考古学会
大木 努 1995 「下総型埴輪基礎考—埴輪同工品論序説—」『埴輪研究会誌』第1号 埴輪研究会
宇野慎敏 1985 「鑄子考」『永永先生米壽記念獻呈論文集 乾』
岡本健一 1997 『將軍山古墳』埼玉県教育委員会
金子彰男・山川守男・山崎 武 1994 「埼玉県の概要」『古代における農具の変遷—稲作技術史を農具から見る—』発表要旨集
鴻巣市 1989 「鴻巣市史」資料編1考古
国立歴史民俗博物館 1994 「共同研究「日本出土土鏡データ集成」2—弥生・古墳時代遺跡出土土鏡データ集成—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集
埼玉県教育委員会 1994 「埼玉県古墳群詳細分布調査報告書」
坂口 一 1993 「火山噴火の年代と季節の推定法」『火山灰考古学』古今書院
坂本和俊 1996 「埼玉古墳群と无耶志国造」『群馬考古学手帳』6 群馬土器観会
穴戸信悟 1984 「厚木市上依知1号墳出土の毛抜き形鉄器について」『神奈川考古』第19号 神奈川考古同人会
寺社下博 1986 「埼玉県熊谷市・蠶塚古墳出土の須恵器」『古分化談叢』第16集 九州古文化研究会
辰巳和弘 1992 「埴輪と絵画の古代学」白水社
田中新史 1994 「使用具の古墳埋納（上）」『古代』第98号 早稲田大学考古学会
1995 「使用具の古墳埋納（下）」『古代』第100号 早稲田大学考古学会
塚原勇人 1996 「北武蔵における窯跡出土円筒埴輪の変遷」『法政考古学』第22集 法政考古学会
南雲芳昭 1987 「行幸田山遺跡」『洪川市発掘調査報告第12集 洪川市教育委員会』
松井和幸 1987 「日本古代の鉄製鋸先、鋸先について」『考古学雑誌』第72巻第3号 日本考古学会
水沼良浩 1990 「塚山古墳群とその周辺」『古代』第89号 早稲田大学考古学会
山崎 武 1995 「鴻巣市遺跡群Ⅲ—生出土塚遺跡D・E地点（本文・図版編）—」鴻巣市教育委員会
若松良一 1981 「生出土塚遺跡」鴻巣市遺跡調査報告書第2集 鴻巣市遺跡調査会

附 篇

古墳時代出土遺物の胎土分析

(株) 第四紀 地質研究所 井上 巖

目 次

- 1 実験条件
- 2 実験結果の取扱
- 3 X線回折試験結果 (埴輪)
 - 3-1 タイプ分類
 - 3-2 石英-斜長石の相関について
- 4 化学分析結果 (埴輪)
 - 4-1 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ の相関について
 - 4-2 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$ の相関について
 - 4-3 $\text{K}_2\text{O-CaO}$ の相関について
- 5 X線回折試験結果 (須恵器)
 - 5-1 タイプ分類
 - 5-2 石英-斜長石の相関について
- 6 化学分析結果 (須恵器)
 - 6-1 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ の相関について
 - 6-2 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$ の相関について
 - 6-3 $\text{K}_2\text{O-CaO}$ の相関について
- 7 まとめ

図表目次

- 第1図 三角ダイヤグラム位置分類図
- 第2図 菱形ダイヤグラム位置分類図
- 第3図 Mo-Mi-Hb三角ダイヤグラム
- 第4図 Mo-Ch, Mi-Hb菱形ダイヤグラム
- 第5図 Qt-Pl図 (埴輪)
- 第6図 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 図 (埴輪)
- 第7図 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$ 図 (埴輪)
- 第8図 $\text{K}_2\text{O-CaO}$ 図 (埴輪)
- 第9図 Qt-Pl図 (須恵器)
- 第10図 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 図 (須恵器)
- 第11図 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$ 図 (須恵器)
- 第12図 $\text{K}_2\text{O-CaO}$ 図 (須恵器)

- 第13図 新屋敷遺跡D区胎土分析資料
- 第14図 新屋敷遺跡C区胎土分析資料 (参考)
- 第1表 胎土性状表 (埴輪)
- 第2表 胎土性状表 (須恵器)
- 第3表 化学分析表 (埴輪)
- 第4表 化学分析表 (須恵器)
- 第5表 須恵器タイプ分類一覧表
- 第6表 埴輪タイプ分類一覧表

X線回折試験及び化学分析試験

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は第1・2表胎土性状表に示す通りである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。

化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020 X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kV, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02°

計数時間: 0.5秒。

1-3 化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセット

し、実験条件は加速電圧：15KV、分析法：スプリント法、分析倍率：200倍、分析有効時間：100秒、分析指定元素10元素で行った。

2 X線回折試験結果の取扱い

実験結果は第1・2表胎土性状表に示す通りである。

胎土性状表の右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト (Mullite)、クリストパライト (Cristobalite) 等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

1) Mont-Mica-Hb三角ダイアグラム

第1図に示すように三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mont, Mica, Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。

三角ダイアグラムはモンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb) のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント (%) で表示する。

モンモリロナイトは Mont/Mont+Mica+Hb*100でパーセントとして求め、同様にMica, Hbも計算し、三角ダイアグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1~4はMont, Mica, Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第1図に示す通りである。

2) Mont-Ch, Mica-Hb菱形ダイアグラム

第2図に示すように菱形ダイアグラムを1~19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20と

して別に検討した。

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の内、

a) 3成分以上含まれない、b) Mont, Chの2成分が含まれない、c) Mica, Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイアグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。

Mont-Ch, Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mont/Mont+Ch*100と計算し、Mica, Hb, Chも各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイアグラム内にある1~7はMont, Mica, Hb, Chの4成分を含み、各辺はMont, Mica, Hb, Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第2図に示す通りである。

2-2 焼成ランク

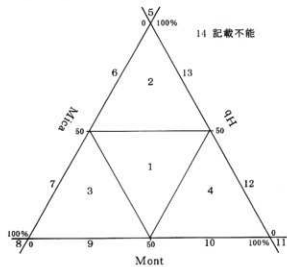
焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト (Mullite) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストパライト (Cristobalite) はムライトより低い温度、ガラスはクリストパライトより更に低い温度で生成する。

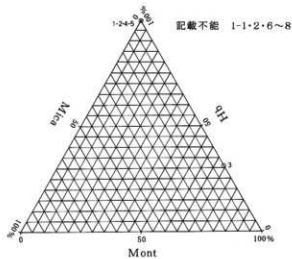
これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI~Vの5段階に区分した。

- 焼成ランクI：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。
- 焼成ランクII：ムライトとクリストパライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
- 焼成ランクIII：ガラスのなかにクリストパライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。
- 焼成ランクIV：ガラスのみが生成し、原土 (素

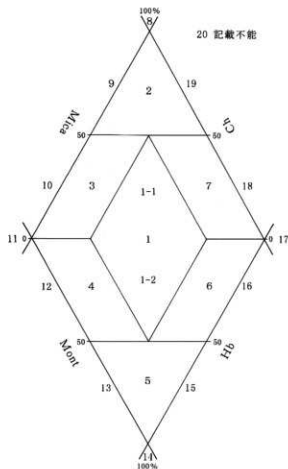
第1図 三角ダイアグラム位置分類図



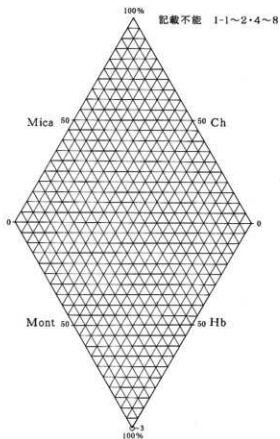
第3図 Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム



第2図 菱形ダイアグラム位置分類図



第4図 Mo-Ch, Mi-Hb菱形ダイアグラム



地土)の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。

- e) 焼成ランクV: 原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のI-Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

3) 化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法(10元素全体で100%になる)で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいて SiO_2 - Al_2O_3 図、 Fe_2O_3 - MgO 図、 K_2O - CaO 図の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

3 X線回折試験結果(増補)

3-1 タイプ分類

第1表胎土性状表には、既分析の新屋敷遺跡C区、古凍根岸裏遺跡、下道添遺跡、埼玉古墳群等の各遺跡と共に新屋敷遺跡D区の増輪を記載してある。

タイプ分類はこれらの遺跡の増輪で新たに行い、第6表増輪タイプ分類一覧表を作成した。

第6表に示すように増輪の胎土はA~Kの11タイプに分類された。

Aタイプ: Hb, Chの2成分を含み、Mont, Micaの2成分に欠ける。

Bタイプ: Hb 1成分を含み、Mont, Mica, Chの3成分に欠ける。

Cタイプ: Hb, Chの2成分を含み、Mont, Micaの2成分に欠ける。

Dタイプ: Mica, Hb, Chの3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。

Eタイプ: Hb, Chの2成分を含み、Mont, Micaの2成分に欠ける。組成的にはCタイプと

同じであるが、検出強度が異なる為に、タイプが異なる。

Fタイプ: Mica, Chの2成分を含み、Mont, Hbの2成分に欠ける。

Gタイプ: Mica 1成分を含み、Mont, Hb, Chの3成分に欠ける。

Hタイプ: Mont, Micaの2成分を含み、Hb, Chの2成分に欠ける。

Iタイプ: Mont, Chの2成分を含み、Mica, Hbの2成分に欠ける。

Jタイプ: Mont, Hbの2成分を含み、Mica, Chの2成分に欠ける。

Kタイプ: Mont, Mica, Hb, Chの4成分にかけ。主に、 $\text{nAl}_2\text{O}_3 \cdot \text{mSiO}_2 \cdot \text{lH}_2\text{O}$ (アルミナゲル)で構成される。

最も多いタイプはKタイプで、全体の50%を占める。次いで、Bタイプが30%を占め、この2タイプで80%に達する。Kタイプは新屋敷遺跡C・D区、古凍根岸裏遺跡、下道添遺跡の各遺跡の増輪で検出される。Bタイプは新屋敷遺跡C区の増輪で多く検出されるもので、C区の特徴と言える。今回分析の新屋敷遺跡D区の増輪は8個のうちKタイプは5個、Bタイプは2個である。

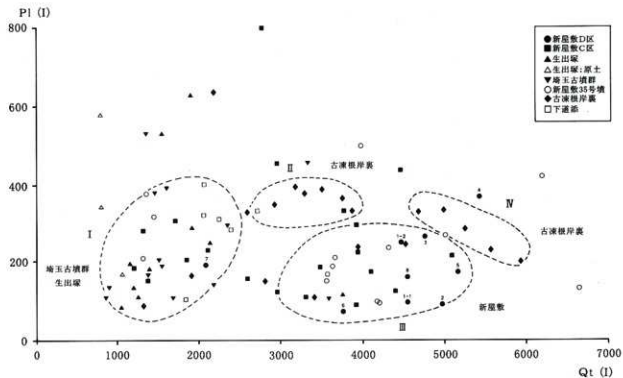
新屋敷D-1の増輪は凸帯部分と本体が異なる胎土で構成されており、凸帯(褐色)はKタイプ、本体はBタイプと異なる結果を得た。

3-2 石英(Qt)-斜長石(Pl)の相関について

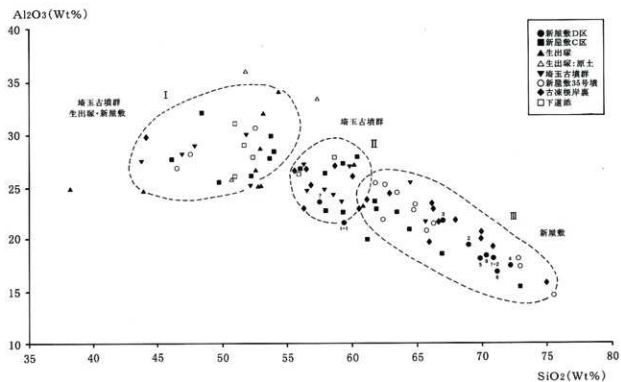
増輪胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、増輪の焼成温度と大きな関わりがある。増輪製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作ると言うことは個々の集団が持つ増輪製作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂は各々固有の石英と斜長石比を有していると言える。

第5图 Qt-Pl图 (填轴)



第6图 $SiO_2-Al_2O_3$ 图 (填轴)



第5図Qt-Pl図に示すようにI～IVの4グループに分類された。

Iグループ: Qt (石英) の強度が低い領域に集中するもので、生出塚遺跡、埼玉古墳群、下道添遺跡の各遺跡から出土した埴輪が集中し、新屋敷遺跡C区と新屋敷35号墳の埴輪が混在する。

IIグループ: 古凍根岸裏遺跡の埴輪が集中する。

IIIグループ: 新屋敷遺跡C・D区、新屋敷35号墳のいわゆる新屋敷系の埴輪が集中する。

IVグループ: 古凍根岸裏遺跡の埴輪が集中する。

この結果から明らかのように、生出塚遺跡、埼玉古墳群、下道添遺跡の各遺跡の埴輪はともに同じ領域にあり、関連性が窺われる。新屋敷遺跡C・D区の埴輪の一部もこれらと関連するが、あまり多くない。新屋敷遺跡C・D区、35号墳の各遺跡から出土した埴輪はIIIグループに集中し、明らかに生出塚系とは異なることがわかる。古凍根岸裏遺跡の埴輪はIIとIVグループに集中し、新屋敷系や生出塚系とは明らかに異なるグループに集中する。このように遺跡毎に明瞭に分かれることが明らかとなった。

4 化学分析結果 (埴輪)

第3表埴輪化学分析表に示すように、新屋敷遺跡、生出塚遺跡、埼玉古墳群、古凍根岸裏遺跡、下道添遺跡等の各遺跡から出土した埴輪を化学分析した。

分析結果に基づいて第6図SiO₂-Al₂O₃図、第7図Fe₂O₃-MgO図、第8図K₂O-CaO図を作成した。

4-1 SiO₂-Al₂O₃の相関について

第6図SiO₂-Al₂O₃図に示すように埴輪はSiO₂の値の低い領域からI、II、IIIの3グループに分類された。Iグループには生出塚遺跡、埼玉古墳群、下道添遺跡の各遺跡の埴輪が集中し、新屋敷遺跡C・D区の埴輪が混在する。IIグループには埼玉古墳群の埴輪が集中し、新屋敷遺跡C区と古凍根岸裏遺跡の埴輪が共存する。IIIグループには新屋敷遺跡D区の埴輪が集中し、新屋敷遺跡C区、新屋敷35号墳の埴輪も共存し、新屋

敷系が集中する。古凍根岸裏遺跡の埴輪も共存する。このように各グループの傾向はQt-Plの相関と同じ傾向を示す。

4-2 Fe₂O₃-MgOの相関について

第7図Fe₂O₃-MgO図に示すように、I～IIIの3グループを形成する。

Iグループには新屋敷系の埴輪が集中し、IIグループには古凍根岸裏遺跡の埴輪が集中し、IIIグループには生出塚遺跡、埼玉古墳群、下道添遺跡の各遺跡の埴輪が集中する。Iグループの新屋敷系とIIIグループの生出塚系は一部で領域が重複する。

4-3 K₂O-CaOの相関について

第8図K₂O-CaO図に示すように、I～IIの2グループに分類される。Iグループには下道添遺跡の埴輪が集中し、IIグループには新屋敷系と生出塚系、埼玉古墳群の各遺跡の埴輪が共存する。

5 X線回折試験結果 (須恵器)

5-1 タイプ分類

第2表須恵器胎土性状表には既分析の新屋敷遺跡C区、埼玉古墳群の各遺跡と共に新屋敷遺跡D区の須恵器を記載してある。タイプ分類はこれらの遺跡の須恵器で新たに行い、第5表須恵器タイプ分類一覧表を作成した。

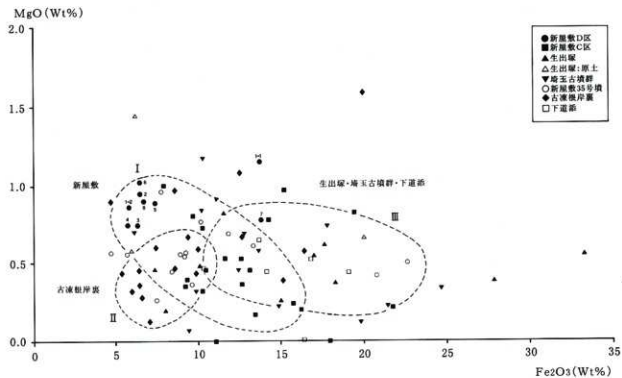
第5表に示すように須恵器の胎土はAタイプだけである。

Aタイプ: Mont, Mica, Hb, Chの4成分にかけ、高温で焼成されているために、粘土鉱物と造岩鉱物は分解してガラスに変質している。このため、本来の鉱物組成とは異なる。

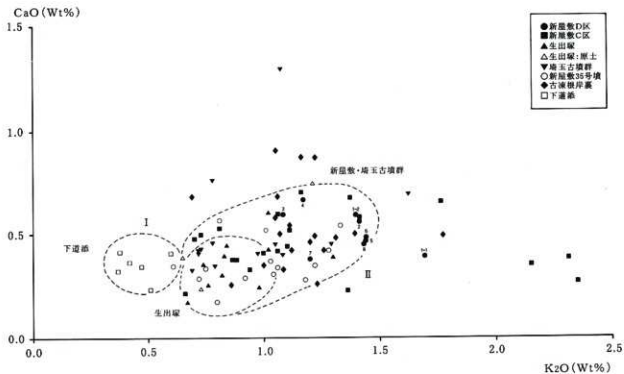
5-2 石英(Qt)-斜長石(Pl)の相関について

第9図Qt-Pl図 (須恵器) に示すようにQt (石英) の強度が1000～2500の領域に集中し、新屋敷遺跡C・D区、埼玉古墳群の各遺跡の須恵器が共存する。

第7图 Fe₂O₃-MgO图 (填輪)



第8图 K₂O-CaO图 (填輪)



6 化学分析結果 (須恵器)

第4表須恵器化学分析表に示すように、新屋敷遺跡C・D区、埼玉古墳群の各遺跡から出土した須恵器を化学分析した。

分析結果に基づいて第10図 $\text{SiO}_2-\text{Al}_2\text{O}_3$ 図、第11図 $\text{Fe}_2\text{O}_3-\text{MgO}$ 図、第12図 $\text{K}_2\text{O}-\text{CaO}$ 図を作成した。

また、これらの遺跡から出土した須恵器と大阪府陶邑窯跡群(5~6C)、愛知県猿投窯跡群(黒笹)から出土した須恵器の成分と比較対比した。

6-1 $\text{SiO}_2-\text{Al}_2\text{O}_3$ の相関について

第10図 $\text{SiO}_2-\text{Al}_2\text{O}_3$ 図に示すように新屋敷遺跡C・D区、埼玉古墳群の須恵器は陶邑窯跡群の領域に集中し、猿投窯跡群の領域には1個のみが該当する。

6-2 $\text{Fe}_2\text{O}_3-\text{MgO}$ の相関について

第11図 $\text{Fe}_2\text{O}_3-\text{MgO}$ 図に示すように、新屋敷遺跡C・D区、埼玉古墳群の須恵器は陶邑窯跡群の MgO の値が高い領域からさらにその上方の MgO の値が高い領域に集中し、新屋敷遺跡C・D区、埼玉古墳群の須恵器はいくぶん領域が上方にシフトしている。猿投窯跡群の領域には2個のみが該当する。

6-3 $\text{K}_2\text{O}-\text{CaO}$ の相関について

第12図 $\text{K}_2\text{O}-\text{CaO}$ 図に示すように、新屋敷遺跡C・D区、埼玉古墳群の須恵器は陶邑窯跡群の領域に集中し、猿投窯跡群の領域には2個のみが該当する。新屋敷遺跡C・D区、埼玉古墳群の須恵器の一部は CaO の値が高い領域に分布する。

以上の結果から判断すると成分的には新屋敷遺跡C・D区、埼玉古墳群の須恵器は陶邑窯跡群の須恵器の成分と非常に似ており、そのほとんどは陶邑窯跡群の須恵器と推察される。猿投窯跡群の須恵器と類似する成分の須恵器は2個と少ない。今回分析した5個の須恵器はそのすべてが陶邑窯跡群産と推察される。新屋敷D-9も陶邑窯跡群産であろう。

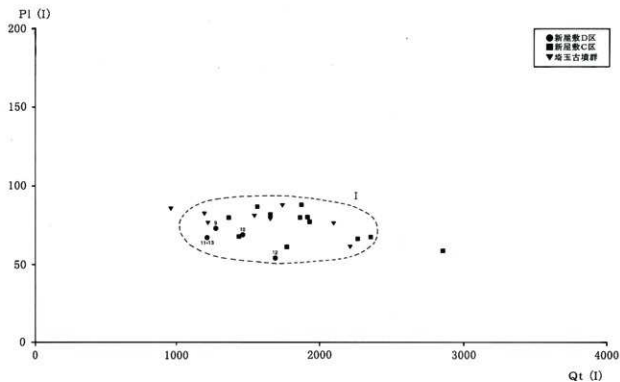
7 まとめ

- 1) 埴輪胎土はA~Kの11タイプに分類され、Kタイプは全体の50%、Bタイプは全体の30%を占

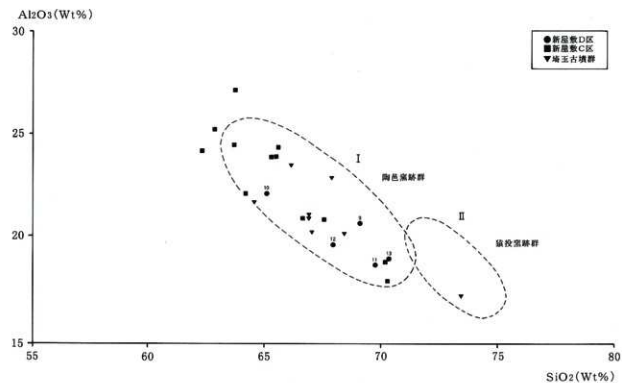
め、両タイプで全体の80%を占める。Bタイプは新屋敷遺跡C区、古凍根岸裏遺跡の埴輪に多く、Kタイプは新屋敷遺跡C区、新屋敷35号墳、古凍根岸裏遺跡、下道添遺跡、生田塚遺跡の埴輪に多い。新屋敷遺跡D区の埴輪はこの2タイプの胎土で構成される。

- 2) X線回折試験に基づくQt-Pl相関では生田塚遺跡の埴輪と埼玉古墳群、下道添遺跡の埴輪は同じグループを形成し関連性が窺われる。このグループの一部に新屋敷35号墳の埴輪が混在し、関連性が窺われる。しかし、新屋敷遺跡D区の埴輪の多くはIIIグループに集中し、新屋敷遺跡C区、新屋敷35号墳の埴輪と共存し、新屋敷系として明らかに生田塚系とは異なる。また、古凍根岸裏系はIIとIVグループに集中し、異質である。
- 3) 埴輪の化学分析結果でも、Qt-Plの相関と同様の傾向が認められる。すなわち、生田塚系と埼玉古墳群、下道添遺跡の埴輪は関連性が高く、新屋敷系は明らかに成分が異なり、胎土が異なる。同様のことは古凍根岸裏遺跡の埴輪にもあり、大きくは生田塚系、新屋敷系、古凍根岸裏系の3タイプに分かれる。
- 4) 須恵器の分析では埼玉古墳群出土の須恵器と新屋敷遺跡D区出土の須恵器はそのほとんどが陶邑窯跡群の須恵器に組成が似ており、陶邑窯跡群産と推察される。猿投窯跡群の須恵器と類似する組成を示すものは2個で、今回の新屋敷遺跡D区の須恵器では認められなかった。

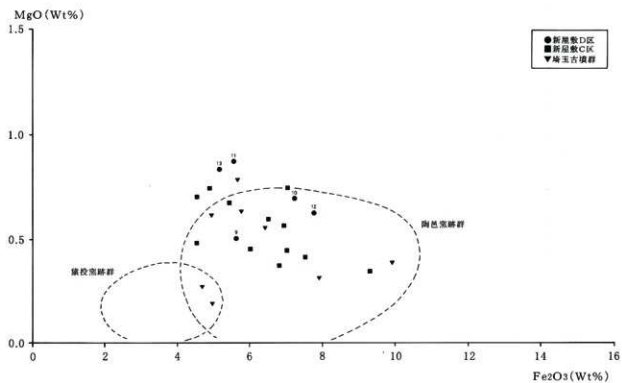
第9図 Qt-Pl図 (須恵器)



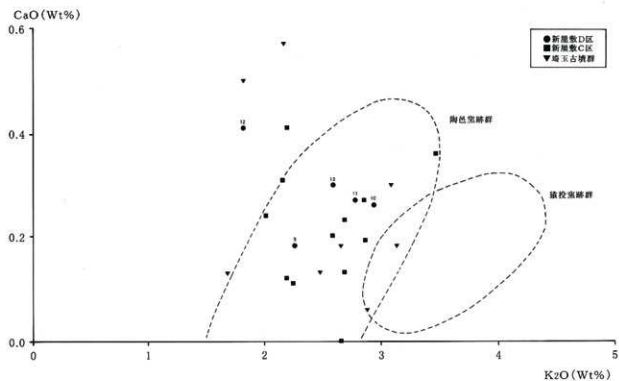
第10図 SiO_2 - Al_2O_3 図 (須恵器)



第11图 Fe₂O₃-MgO图 (須惠器)

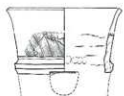


第12图 K₂O-CaO图 (須惠器)

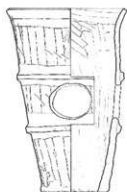


第13図 新屋敷遺跡D区胎土分析資料

埴輪



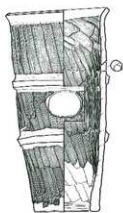
新屋敷D-1 (58号墳 20)



新屋敷D-2 (60号墳 87)



新屋敷D-3 (60号墳 20)



新屋敷D-4 (60号墳 49)



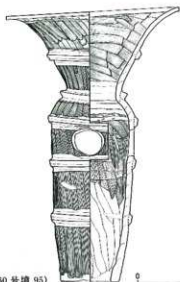
新屋敷D-7 (61号墳 5)



新屋敷D-5 (60号墳 67)



新屋敷D-8 (63号墳 21)



新屋敷D-6 (60号墳 95)



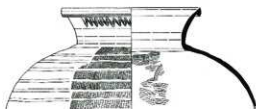
須恵器



新屋敷D-9 (60号墳 5)



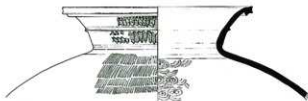
新屋敷D-10 (60号墳 24)



新屋敷D-12 (60号墳 30)



新屋敷D-11 (60号墳 10)



新屋敷D-13 (60号墳 31)



第14図 新屋敷遺跡C区胎土分析資料



『新屋敷遺跡C区』(事業団報告書第175集)より転載

第1表 胎土性状表(増輪)

試料No	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物														器種	遺跡名		
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch-Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K fets	Halloy	Kaol	Pyrite	Au			ガラス	
新屋敷D1-1	K		14	20						4544	91							55			円筒埴輪(赤色)	D区58号墳
新屋敷D1-2	B		5	20						4462	243	100									円筒埴輪(灰色)	D区58号墳
新屋敷D-2	K		14	20				45		4970	86	148	82					74			円筒埴輪	D区60号墳
新屋敷D-3	J		12	14	146			65		4758	258	110									円筒埴輪	D区60号墳
新屋敷D-4	B		5	20				69		5425	366	121									円筒埴輪	D区60号墳
新屋敷D-5	B		5	20				47		5160	166	221									円筒埴輪	D区60号墳
新屋敷D-6	K		14	20						3767	67	223	90					80			朝顔形埴輪	D区60号墳
新屋敷D-7	K		14	20						2082	187	94						62			円筒埴輪	D区61号墳
新屋敷D-8	K		14	20						4539	155										円筒埴輪	D区63号墳
新屋敷C-13	B		5	20				59		2113	226	112									円筒埴輪	C区1号墳
新屋敷C-14	K		14	20						1325	278	134									円筒埴輪	C区1号墳
新屋敷C-15	B		5	20				111		3914	288	80									円筒埴輪	C区4号墳
新屋敷C-16	K		14	20						2959	118	196	47								円筒埴輪	C区4号墳
新屋敷C-17	B		5	20				92		3484	181	119									円筒埴輪	C区4号墳
新屋敷C-18	A		5	11				77	190	3771	329	94									円筒埴輪	C区4号墳
新屋敷C-19	B		5	20				98		1716	304	204									円筒埴輪	C区22号墳
新屋敷C-20	K		14	20					190	1852	202	188									円筒埴輪	C区22号墳
新屋敷C-21	B		5	20				84		3937	218	100									円筒埴輪	C区26号墳
新屋敷C-22	B		5	20				60		1381	149	206									円筒埴輪	C区26号墳
新屋敷C-23	B		5	20				102		5088	208										円筒埴輪	C区26号墳
新屋敷C-24	K		14	20						4099	168	97									円筒埴輪	C区40号墳
新屋敷C-25	K		14	20						3310	105	76									円筒埴輪	C区40号墳
新屋敷C-26	K		14	20						3918	85	62									円筒埴輪	C区40号墳
新屋敷C-27	B		5	20				75		2763	796	112									円筒埴輪	C区43号墳
新屋敷C-28	K		14	20						4396	119										円筒埴輪	C区52号墳
新屋敷C-29	I		10	20	211				201	4454	434										円筒埴輪	C区52号墳
新屋敷C-30	K		14	20						1210	182	114									大型円筒埴輪	C区増輪帯
新屋敷C-31	K		14	20						2595	153	111									円筒埴輪	馬室2号窯
新屋敷C-32	B		5	20				92		2953	452	172									円筒埴輪	馬室2号窯
新屋敷C-33	K		14	20						1400	180	132									円筒埴輪	生田塚D-1号捨場
新屋敷C-34	G		8	20				93		1211	133	120					88				円筒埴輪	生田塚D-17号窯
新屋敷C-35	K		14	20						1164	194	117									円筒埴輪	生田塚D-17号窯
新屋敷C-36	K		14	20						1057	84										円筒埴輪	生田塚D-21号窯

試料 No	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類			粘土鉱物および造岩鉱物														器 種	遺 跡 名						
			Mo-Mi-Ib	Mo-Ch-Mi-Ib	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au	ガラス								
新屋敷C-37	B		5	20				73				1548	531	188											円筒埴輪	生出塚J-25-26号窯	
新屋敷C-38	E		7	20			84	77				1894	628	157											円筒埴輪	生出塚J-25-26号窯	
新屋敷C-39	D		7	9			128	84	181			2141	245												円筒埴輪	生出塚W-32号窯	
新屋敷C-40	K		14	20								1262	110	111				52	106						円筒埴輪	生出塚W-32号窯	
新屋敷C-41	K		14	20								1923	285	198											円筒埴輪	生出塚W-36号窯	
新屋敷C-42	K		14	20								3759	112	138											円筒埴輪	生出塚W-36号窯	
新屋敷C-43	G		8	20				117				804	342	161											原土	生出塚35-採掘坑	
新屋敷C-44	G		8	20				259				1065	166												原土	生出塚35-採掘坑	
新屋敷C-45	A		5	11						106	192	101	792	578												原土	C区谷部
新屋敷C-46	A		5	11						87	189		3336	454	195											円筒埴輪	埼玉稲荷山古墳
新屋敷C-47	B		5	20						82			2356	290	125											円筒埴輪	埼玉稲荷山古墳
新屋敷C-48	B		5	20						65			1609	391	180					322						円筒埴輪	埼玉二子山古墳
新屋敷C-49	K		14	20								1382	165	112												円筒埴輪	埼玉二子山古墳
新屋敷C-50	A		5	11						319	183		1361	531	156											円筒埴輪	埼玉瓦塚古墳
新屋敷C-51	K		14	20								1555	186													円筒埴輪	埼玉瓦塚古墳
新屋敷C-52	K		14	20								2183	138	113												円筒埴輪	埼玉将軍山古墳
新屋敷C-53	J		12	14			151			75			906	134												円筒埴輪	埼玉将軍山古墳
新屋敷C-54	B		5	20						56			3592	101	133											円筒埴輪	埼玉将軍山古墳
新屋敷C-56	K		14	20								1690	106	568				73					53			須恵貫表	埼玉中の山古墳
新屋敷C-57	B		5	20						84			861	107	89											円筒埴輪	小沼耕地1号墳
新屋敷C-58	B		5	20						55			1523	201	176											円筒埴輪	B区15号墳
新屋敷C-60	K		14	20								1467	380	245												円筒埴輪	B区17号墳
新屋敷-1	K		14	20								4205	90													中粒 円筒埴輪	C区35号墳
新屋敷-2	K		14	20								3560	146	113												中粒 円筒埴輪	C区35号墳
新屋敷-3	K		14	20								3634	183	113												中粒 円筒埴輪	C区35号墳
新屋敷-4	K		14	20								4177	93	125												中粒 円筒埴輪	C区35号墳
新屋敷-5	B		5	20						66			6181	419	95											中粒 円筒埴輪	C区35号墳
新屋敷-6	B		5	20						85			5008	262	158											中粒 円筒埴輪	C区35号墳
新屋敷-7	K		14	20								4310	229	93												中粒 円筒埴輪	C区35号墳
新屋敷-8	K		14	20								3574	163	118												中粒 円筒埴輪	C区35号墳
新屋敷-9	J		12	14			186			80			3972	496												中粒 円筒埴輪	C区35号墳
新屋敷-10	K		14	20							222		3662	205												中粒 円筒埴輪	C区35号墳
新屋敷-11	K		14	20									1360	377	124											中粒 円筒埴輪	C区35号墳
新屋敷-12	K		14	20									1322	207	124											中粒 円筒埴輪	C区35号墳

試料 No	タイプ分類	焼成ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物														器種	遺跡名		
			Mo-Mb-Hb	Mo-Ca, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au			ガラス	
新屋敷-13	K		14	20				158		6643	126								中粒	朝顔形埴輪	C区35号墳	
新屋敷-14	C		6	20		99	135			1452	316	125							中粒	大型円筒埴輪	C区埴輪棺	
古塚-2	K		14	20						3182	392	179								円筒埴輪	古塚1号墳	
古塚-3	F		8	8		122		196		2922	346									円筒埴輪	古塚1号墳	
古塚-4	K		14	20				155		2174	636									円筒埴輪	古塚1号墳	
古塚-5	B		5	20			69			3295	375	107								円筒埴輪	古塚1号墳	
古塚-6	B		5	20			72			3747	363	101								円筒埴輪	古塚1号墳	
古塚-7	B		5	20			71			3870	328	116								円筒埴輪	古塚1号墳	
古塚-8	B		5	20			115			3508	386									円筒埴輪	古塚1号墳	
古塚-10	B		5	20			76			5252	279									円筒埴輪	古塚7号墳	
古塚-11	H		10	17	145	102				4984	332	510								円筒埴輪	古塚7号墳	
古塚-12	B		5	20			90			5569	224	102								円筒埴輪	古塚7号墳	
古塚-13	B		5	20			76			4674	327	120								円筒埴輪	古塚7号墳	
古塚-14	B		5	20			139			3412	104	80								円筒埴輪	古塚8号墳	
古塚-15	A		5	11			91	164		2822	145					81				円筒埴輪	古塚8号墳	
古塚-16	K		14	20						1913	161	146	58				153			円筒埴輪	古塚8号墳	
古塚-17	K		14	20						1328	86	467	121				150			円筒埴輪	古塚8号墳	
古塚-18	B		5	11			109	165		3944	229									円筒埴輪	古塚10号墳	
古塚-19	K		14	20						5927	192	98									人物埴輪	古塚7号墳
古塚-20	J		12	14	208		81			4495	241										人物埴輪	古塚7号墳
古塚-21	K		14	20				146		2591	326	82									大刀形埴輪	古塚4号墳
下道添-1	K		14	20						1841	102	1120	177				173				円筒埴輪	古墳跡
下道添-2	K		14	20						2712	329										円筒埴輪	古墳跡
下道添-3	B		5	20			112			2058	319										円筒埴輪	古墳跡
下道添-4	K		14	20						2060	400										円筒埴輪	古墳跡
下道添-5	K		14	20						2247	307										円筒埴輪	古墳跡
下道添-6	K		14	20						2383	278	187									円筒埴輪	古墳跡

Mont: モンモロロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石 Ch: 緑泥石 (Ch:Fe 一次反射, Ch:Mg 二次反射) Qt: 石英 Pl: 斜長石 Crist: クリスタロライト
Mullite: ムライト K-fels: カリ長石 Halloy: ハロイサイト Kaol: カオリナイト Pyrite: 黄鉄鉱 Au: 蒼黄輝石 Py: 紫輝石

第2表 胎土性状表(須恵器)

試料No	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物														器種	造跡名	
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au			ガラス
新屋敷D-9	A		14	20						1269	72	423	128					111		高坏	D区60号墳
新屋敷D-10	A		14	20						1458	68	165	186					182		高坏	D区60号墳
新屋敷D-11	A		14	20						1211	66	126	152					128		甕	D区60号墳
新屋敷D-12	A		14	20						1688	53	374	168					195		甕	D区60号墳
新屋敷D-13	A		14	20						1211	66	143	146					119		甕	D区60号墳
新屋敷C-1	A		14	20						1925	76	383	174					194		甕	C区4号墳
新屋敷C-2	A		14	20						1870	87	237	172					198		甕	C区4号墳
新屋敷C-3	A		14	20						1435	67	287	204					209		甕	C区4号墳
新屋敷C-4	A		14	20						2350	66	178	165					157		甕	C区22号墳
新屋敷C-5	A		14	20						1652	80	139	139					111		甕	C区23号墳
新屋敷C-6	A		14	20						1909	79	163	153					128		甕	C区26号墳
新屋敷C-7	A		14	20						1862	79	392	184					149		高坏蓋	C区35号墳
新屋敷C-8	A		14	20						1560	86	262	216					176		高坏	C区35号墳
新屋敷C-9	A		14	20						2851	57	161	136					119		高坏	C区35号墳
新屋敷C-10	A		14	20						1768	60	247	185					204		甕	C区35号墳
新屋敷C-11	A		14	20						1360	79	187	191					154		甕	C区35号墳
新屋敷C-12	A		14	20						2258	65	508	163					144		甕	C区46号墳
新屋敷C-55	A		14	20						1738	87	478	157					138		甕	埼玉将軍山古墳
新屋敷C-59	A		14	20						1652	78	170	156							甕	B区15号墳
新屋敷C-61	A		14	20						1216	76	158	167							甕	埼玉二子山古墳
新屋敷C-62	A		14	20						957	85	535	186					171		甕	埼玉瓦塚古墳
新屋敷C-63	A		14	20						2204	60	554	167					220		甕	埼玉瓦塚古墳
新屋敷C-64	A		14	20						2092	75	684	161							甕	埼玉鉄砲山古墳
新屋敷C-65	A		14	20						1538	80	122	143					135		甕	埼玉将軍山古墳
新屋敷C-66	A		14	20						1190	82	146	144					146		甕	埼玉将軍山古墳

Mont: モンモロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石 Ch: 緑泥石 (Ch:Fe 一次反射, Ch:Mg 二次反射) Qt: 石英 Pl: 斜長石 Crist: クリスタブライト
Mullite: ムライト K-fels: カリ長石 Halloy: ハロイサイト Kaol: カオリナイト Pyrite: 黄鉄鉱 Au: 普通輝石 Py: 紫蘇輝石

第3表 化学分析表(续填)

试料番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	NiO	Total	器種	遺跡名
新屋敷D1-1	0.40	1.15	21.53	59.33	1.69	0.38	1.08	0.70	13.73	0.00	99.99	円筒埴輪(赤色)	D区58号墳
新屋敷D1-2	0.62	0.86	17.99	70.81	1.40	0.58	1.37	0.39	5.77	0.20	99.99	円筒埴輪(灰色)	D区58号墳
新屋敷D-2	0.83	0.95	19.28	68.94	1.41	0.56	1.37	0.20	6.45	0.00	99.99	円筒埴輪	D区60号墳
新屋敷D-3	0.75	0.74	21.76	66.93	1.08	0.59	1.22	0.64	6.30	0.00	100.01	円筒埴輪	D区60号墳
新屋敷D-4	0.69	0.74	17.25	72.14	1.17	0.66	1.43	0.15	5.76	0.02	100.01	円筒埴輪	D区60号墳
新屋敷D-5	0.31	0.89	17.95	69.82	1.44	0.46	1.39	0.31	7.41	0.01	99.99	円筒埴輪	D区60号墳
新屋敷D-6	1.02	1.02	16.72	71.09	1.44	0.47	1.20	0.48	6.47	0.09	100.00	朝顔形埴輪	D区60号墳
新屋敷D-7	0.48	0.77	23.65	67.50	1.20	0.37	1.25	0.94	13.85	0.00	100.01	円筒埴輪	D区61号墳
新屋敷D-8	0.85	0.90	18.24	70.30	1.43	0.44	0.83	0.33	6.65	0.05	100.02	円筒埴輪	D区63号墳
新屋敷C-13	0.73	0.20	26.12	52.17	2.31	0.37	1.90	0.00	16.20	0.00	100.00	円筒埴輪	C区1号墳
新屋敷C-14	0.59	0.82	25.53	49.69	1.16	0.70	1.80	0.22	19.40	0.08	99.99	円筒埴輪	C区1号墳
新屋敷C-15	0.40	0.45	22.57	63.42	1.00	0.40	1.16	0.11	10.44	0.05	100.00	円筒埴輪	C区4号墳
新屋敷C-16	0.68	0.77	19.78	61.13	1.37	0.67	1.03	0.26	14.29	0.00	99.98	円筒埴輪	C区4号墳
新屋敷C-17	0.34	0.97	22.72	57.97	0.87	0.37	1.13	0.31	15.19	0.13	100.00	円筒埴輪	C区4号墳
新屋敷C-18	0.69	0.80	23.65	61.71	1.06	0.59	1.32	0.51	9.67	0.00	100.00	円筒埴輪	C区4号墳
新屋敷C-19	0.53	0.36	29.91	53.67	0.81	0.52	1.49	0.07	12.65	0.00	100.01	円筒埴輪	C区22号墳
新屋敷C-20	0.59	0.45	26.75	56.00	1.10	0.43	1.46	0.07	13.12	0.03	100.00	円筒埴輪	C区22号墳
新屋敷C-21	0.45	0.72	20.81	64.36	1.41	0.57	1.30	0.14	10.24	0.00	100.00	円筒埴輪	C区26号墳
新屋敷C-22	0.32	0.21	27.71	46.05	0.88	0.37	2.05	0.67	21.74	0.00	100.00	円筒埴輪	C区26号墳
新屋敷C-23	0.54	0.00	18.37	66.89	1.11	0.51	1.16	0.05	11.06	0.32	100.01	円筒埴輪	C区26号墳
新屋敷C-24	0.00	0.52	22.92	61.81	1.36	0.22	1.06	0.54	11.58	0.00	100.01	円筒埴輪	C区40号墳
新屋敷C-25	0.12	0.00	32.12	48.34	0.66	0.21	0.43	0.00	17.93	0.20	100.01	円筒埴輪	C区40号墳
新屋敷C-26	0.18	0.24	27.76	53.59	0.94	0.32	1.24	0.00	15.72	0.00	99.99	円筒埴輪	C区40号墳
新屋敷C-27	1.16	0.52	22.59	59.29	1.76	0.65	1.20	0.08	12.61	0.15	100.01	円筒埴輪	C区43号墳
新屋敷C-28	0.03	0.35	15.26	72.91	0.70	0.47	0.84	0.00	9.18	0.26	100.00	円筒埴輪	C区52号墳
新屋敷C-29	0.17	0.39	27.90	60.31	0.73	0.49	0.71	0.00	9.31	0.00	100.01	円筒埴輪	C区52号墳
新屋敷C-30	0.52	0.17	28.41	53.91	1.06	0.41	1.68	0.18	13.45	0.21	100.00	大型円筒埴輪	C区埴輪棺
新屋敷C-31	0.39	1.00	27.28	59.24	2.35	0.26	1.42	0.00	7.89	0.18	100.01	円筒埴輪	馬室2号室
新屋敷C-32	1.10	0.32	26.33	57.89	2.15	0.34	1.31	0.32	10.25	0.00	100.01	円筒埴輪	馬室2号室
新屋敷C-33	0.55	0.37	25.23	52.78	0.98	0.24	1.58	0.00	18.26	0.00	99.99	円筒埴輪	生田塚D-1号捨場
新屋敷C-34	0.25	0.38	24.73	43.86	0.83	0.39	1.59	0.10	27.87	0.00	100.00	円筒埴輪	生田塚D-1号捨場
新屋敷C-35	0.66	0.61	25.14	52.72	1.02	0.60	1.51	0.13	17.60	0.00	99.99	円筒埴輪	生田塚D-17号室
新屋敷C-36	0.48	0.55	24.97	38.18	0.67	0.17	1.37	0.33	33.28	0.00	100.00	円筒埴輪	生田塚D-21号室
新屋敷C-37	0.64	0.48	32.07	53.08	0.84	0.44	1.96	0.42	10.08	0.00	100.01	円筒埴輪	生田塚J-25-26号室
新屋敷C-38	1.09	0.20	27.17	60.10	1.02	0.42	1.60	0.13	7.99	0.28	100.00	円筒埴輪	生田塚J-25-26号室
新屋敷C-39	0.32	0.26	28.74	52.84	0.76	0.25	1.81	0.03	14.99	0.00	100.00	円筒埴輪	生田塚W-32号室
新屋敷C-40	0.29	0.54	26.71	52.51	0.82	0.30	1.60	0.25	16.99	0.00	100.01	円筒埴輪	生田塚W-32号室
新屋敷C-41	0.58	0.46	34.08	54.28	0.74	0.35	1.93	0.22	7.35	0.00	99.99	円筒埴輪	生田塚W-36号室
新屋敷C-42	0.21	0.82	23.26	60.80	1.30	0.38	1.04	0.30	11.55	0.34	100.00	円筒埴輪	生田塚W-36号室
新屋敷C-43	0.44	0.65	25.74	50.64	0.65	0.38	1.37	0.16	19.97	0.00	100.00	原土	生田塚35-探掘坑
新屋敷C-44	0.07	0.57	33.32	57.26	0.73	0.23	1.61	0.27	5.93	0.00	99.99	原土	生田塚35-探掘坑
新屋敷C-45	0.51	1.44	35.94	51.71	1.21	0.74	1.85	0.19	6.17	0.24	100.00	原土	C区谷部
新屋敷C-46	0.92	0.07	21.64	65.61	0.69	0.32	1.21	0.13	9.42	0.00	100.01	円筒埴輪	埼玉稲荷山古墳
新屋敷C-47	0.78	0.22	24.66	56.52	1.05	0.44	1.23	0.24	14.86	0.00	100.00	円筒埴輪	埼玉稲荷山古墳
新屋敷C-48	1.11	1.17	23.63	59.18	1.07	1.29	1.89	0.28	10.26	0.11	99.99	円筒埴輪	埼玉二子山古墳
新屋敷C-49	0.55	0.33	27.51	43.74	0.98	0.40	1.56	0.11	24.66	0.16	100.00	円筒埴輪	埼玉二子山古墳
新屋敷C-50	0.61	0.69	25.43	64.41	1.08	0.39	1.16	0.12	6.12	0.00	100.01	円筒埴輪	埼玉瓦塚古墳
新屋敷C-51	0.71	0.73	25.20	52.10	0.78	0.76	1.63	0.31	17.78	0.00	100.00	円筒埴輪	埼玉瓦塚古墳

試料番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	NiO	Total	器種	遺跡名
新羅敷C-52	0.86	0.68	24.29	58.56	1.29	0.44	0.94	0.00	12.78	0.16	100.00	円筒埴輪	埼玉將軍山古墳
新羅敷C-53	0.28	0.45	27.14	56.24	0.78	0.45	1.68	0.43	12.44	0.10	99.99	円筒埴輪	埼玉將軍山古墳
新羅敷C-54	0.28	0.32	27.01	59.71	0.79	0.34	1.44	0.26	9.85	0.00	100.00	円筒埴輪	埼玉將軍山古墳
新羅敷C-56	1.86	0.84	24.81	57.85	1.62	0.69	1.24	0.42	10.19	0.47	99.99	須惠貫蓋	埼玉中の山古墳
新羅敷C-57	0.30	0.22	28.21	46.87	0.72	0.40	1.60	0.00	21.49	0.19	100.00	円筒埴輪	小沼跡地1号墳
新羅敷C-58	0.36	0.57	30.02	51.76	0.73	0.42	1.88	0.24	13.69	0.34	100.01	円筒埴輪	B区15号墳
新羅敷C-60	0.18	0.12	29.00	47.84	0.72	0.41	1.94	0.00	19.79	0.00	100.00	円筒埴輪	B区17号墳
新羅敷-1	0.22	0.96	21.45	66.24	1.22	0.34	1.22	0.50	7.73	0.11	99.99	円筒埴輪	C区35号墳
新羅敷-2	0.07	0.68	21.83	62.37	1.03	0.36	1.22	0.60	11.84	0.00	100.00	円筒埴輪	C区35号墳
新羅敷-3	0.25	0.54	22.80	64.71	0.92	0.28	1.12	0.00	9.17	0.20	99.99	円筒埴輪	C区35号墳
新羅敷-4	0.11	0.76	20.68	65.72	1.04	0.30	1.10	0.00	10.14	0.16	100.01	円筒埴輪	C区35号墳
新羅敷-5	0.55	0.55	17.22	72.87	1.28	0.41	1.43	0.00	5.69	0.00	100.00	円筒埴輪	C区35号墳
新羅敷-6	0.61	0.56	17.97	72.74	1.33	0.53	1.22	0.08	4.72	0.24	100.00	円筒埴輪	C区35号墳
新羅敷-7	0.20	0.55	25.22	62.49	1.06	0.33	1.00	0.04	8.90	0.21	100.00	円筒埴輪	C区35号墳
新羅敷-8	0.27	0.44	23.35	64.79	1.18	0.27	0.89	0.00	8.41	0.39	99.99	円筒埴輪	C区35号墳
新羅敷-9	0.38	0.56	24.50	63.40	0.75	0.33	0.86	0.00	9.22	0.00	100.00	円筒埴輪	C区35号墳
新羅敷-10	0.20	0.36	25.39	61.74	1.01	0.51	0.99	0.18	9.61	0.00	99.99	円筒埴輪	C区35号墳
新羅敷-11	0.51	0.49	26.87	46.44	0.72	0.28	1.75	0.08	22.62	0.22	99.98	円筒埴輪	C区35号墳
新羅敷-12	0.37	0.41	28.17	47.50	0.61	0.34	1.66	0.15	20.79	0.00	100.00	円筒埴輪	C区35号墳
新羅敷-13	0.05	0.26	14.45	75.52	0.80	0.17	0.59	0.33	7.48	0.36	100.01	朝顔形埴輪	C区35号墳
新羅敷-14	0.19	0.60	30.62	52.48	0.81	0.56	1.41	0.00	13.35	0.00	100.02	大型円筒埴輪	C区埴輪棺
古塚-2	0.38	0.43	27.03	58.66	1.05	0.90	1.40	0.26	9.88	0.00	99.99	円筒埴輪	古塚1号墳
古塚-3	0.48	0.66	26.02	60.00	1.05	0.57	1.37	0.48	9.36	0.00	99.99	円筒埴輪	古塚1号墳
古塚-4	0.38	0.57	22.93	56.26	1.22	0.87	0.99	0.21	16.37	0.00	100.00	円筒埴輪	古塚1号墳
古塚-5	0.66	0.36	22.86	66.22	1.16	0.87	1.27	0.16	6.44	0.00	100.00	円筒埴輪	古塚1号墳
古塚-6	0.74	0.46	24.40	62.88	1.00	0.34	1.30	0.25	8.55	0.08	100.00	円筒埴輪	古塚1号墳
古塚-7	0.57	0.45	19.86	69.89	1.22	0.48	1.02	0.11	6.40	0.00	100.00	円筒埴輪	古塚1号墳
古塚-8	0.63	0.58	23.84	61.06	1.31	0.47	1.82	0.08	9.96	0.25	100.00	円筒埴輪	古塚1号墳
古塚-10	0.60	0.43	20.55	69.93	1.08	0.32	1.47	0.07	5.35	0.21	100.01	円筒埴輪	古塚7号墳
古塚-11	0.34	0.32	21.77	67.90	1.07	0.49	1.39	0.55	5.97	0.20	100.00	円筒埴輪	古塚7号墳
古塚-12	0.41	0.13	23.40	66.10	1.12	0.41	1.35	0.03	7.06	0.00	100.01	円筒埴輪	古塚7号墳
古塚-13	0.40	0.90	15.67	74.96	1.11	0.52	1.06	0.50	4.68	0.20	100.00	円筒埴輪	古塚7号墳
古塚-14	0.06	0.38	26.53	55.65	0.86	0.25	0.81	0.30	15.15	0.00	99.99	円筒埴輪	古塚8号墳
古塚-15	0.06	0.66	26.71	56.47	1.06	0.68	1.23	0.34	12.68	0.10	99.99	円筒埴輪	古塚8号墳
古塚-16	0.75	1.08	25.19	56.81	1.39	0.49	1.54	0.18	12.51	0.06	100.00	円筒埴輪	古塚8号墳
古塚-17	0.87	1.58	29.83	44.08	1.26	0.41	1.36	0.32	19.88	0.38	99.97	円筒埴輪	古塚8号墳
古塚-18	0.51	0.97	19.50	65.93	0.69	0.68	2.64	0.46	8.57	0.06	100.01	円筒埴輪	古塚10号墳
古塚-19	0.39	0.28	19.06	70.79	1.23	0.25	1.25	0.04	6.59	0.11	99.99	人物埴輪	古塚7号墳
古塚-20	0.11	0.59	21.63	66.58	1.20	0.45	1.23	0.39	7.47	0.35	100.00	人物埴輪	古塚7号墳
古塚-21	0.77	0.53	22.94	60.49	1.77	0.48	1.14	0.08	11.49	0.31	100.00	大刀形埴輪	古塚4号墳
下道添-1	0.43	0.46	27.84	58.62	0.37	0.32	1.32	0.08	10.31	0.24	99.99	円筒埴輪	古墳跡
下道添-2	0.43	0.64	26.19	55.85	0.42	0.36	1.30	1.11	13.71	0.00	100.00	古墳跡	古墳跡
下道添-3	0.29	0.01	29.06	51.61	0.51	0.23	1.46	0.45	16.39	0.00	100.01	円筒埴輪	古墳跡
下道添-4	0.61	0.52	27.90	52.31	0.38	0.41	1.04	0.01	16.81	0.00	99.99	円筒埴輪	古墳跡
下道添-5	0.79	0.43	26.04	50.92	0.47	0.34	1.42	0.31	19.04	0.26	100.02	円筒埴輪	古墳跡
下道添-6	0.40	0.44	31.08	50.89	0.60	0.40	1.44	0.51	14.17	0.07	100.00	円筒埴輪	古墳跡

第4表 化学分析表(須臾器)

試料番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	NiO	Total	器種	遺跡名
新屋敷D-9	0.45	0.50	20.65	69.04	2.26	0.18	0.85	0.32	5.63	0.13	100.01	高坏	D区60号墳
新屋敷D-10	0.56	0.69	22.21	65.04	2.94	0.26	0.72	0.21	7.22	0.15	100.00	高坏	D区60号墳
新屋敷D-11	0.64	0.87	18.63	69.75	2.77	0.27	0.72	0.57	5.54	0.25	100.01	甕	D区60号墳
新屋敷D-12	0.54	0.62	19.60	67.92	1.81	0.41	0.83	0.52	7.75	0.00	100.00	甕	D区60号墳
新屋敷D-13	0.83	0.83	18.90	70.28	2.58	0.30	0.79	0.33	5.16	0.00	100.00	甕	D区60号墳
新屋敷C-1	0.82	0.74	17.86	70.27	2.19	0.41	0.63	0.05	7.03	0.00	100.00	甕	C区4号墳
新屋敷C-2	1.39	0.45	20.90	66.63	3.46	0.36	0.69	0.11	6.01	0.00	100.00	甕	C区4号墳
新屋敷C-3	1.02	0.44	24.21	62.28	2.58	0.20	1.64	0.31	7.02	0.32	100.02	甕	C区4号墳
新屋敷C-4	0.77	0.37	20.85	67.53	2.15	0.31	0.78	0.20	6.81	0.22	99.99	甕	C区22号墳
新屋敷C-5	0.93	0.70	24.39	65.53	2.68	0.23	0.68	0.31	4.54	0.00	99.99	甕	C区23号墳
新屋敷C-6	0.71	0.74	23.93	65.44	2.86	0.19	0.95	0.27	4.88	0.03	100.00	甕	C区26号墳
新屋敷C-7	0.52	0.41	24.50	63.64	2.24	0.11	0.64	0.22	7.51	0.20	99.99	高坏蓋	C区35号墳
新屋敷C-8	0.82	0.48	27.13	63.67	2.65	0.00	0.56	0.15	4.54	0.00	100.00	高坏	C区35号墳
新屋敷C-9	0.16	0.56	23.93	65.28	2.19	0.12	0.84	0.00	6.93	0.00	100.01	高坏	C区35号墳
新屋敷C-10	0.96	0.59	25.24	62.79	2.68	0.13	1.00	0.00	6.50	0.10	99.99	甕	C区35号墳
新屋敷C-11	0.99	0.67	18.79	70.19	2.85	0.27	0.66	0.00	5.43	0.15	100.00	甕	C区35号墳
新屋敷C-12	0.61	0.34	22.18	64.16	2.01	0.24	1.03	0.15	9.29	0.00	100.01	甕	C区46号墳
新屋敷C-55	0.63	0.31	20.19	67.01	1.81	0.50	1.35	0.17	7.90	0.13	100.00	甕	埼玉将軍山古墳
新屋敷C-59	0.76	0.61	23.53	66.10	2.88	0.06	0.86	0.27	4.94	0.00	100.01	甕	B区15号墳
新屋敷C-61	1.36	0.78	20.95	66.87	3.13	0.18	1.02	0.04	5.66	0.00	99.99	甕	埼玉二子山古墳
新屋敷C-62	1.13	0.55	21.08	66.87	2.16	0.57	0.74	0.48	6.41	0.00	99.99	甕	埼玉瓦塚古墳
新屋敷C-63	0.59	0.38	21.72	64.52	1.68	0.13	1.02	0.00	9.91	0.05	100.00	甕	埼玉瓦塚古墳
新屋敷C-64	0.56	0.19	22.94	67.83	2.47	0.13	0.92	0.00	4.97	0.00	100.01	甕	埼玉鉄砲山古墳
新屋敷C-65	0.78	0.27	17.18	73.40	2.65	0.18	0.85	0.00	4.69	0.00	100.00	甕	埼玉将軍山古墳
新屋敷C-66	0.87	0.63	20.11	68.37	3.08	0.30	0.89	0.00	5.76	0.00	100.01	甕	埼玉将軍山古墳

第5表 須臾器タイプ分類一覧表

試料 No.	タイプ分類	器種	遺跡名	試料 No.	タイプ分類	器種	遺跡名
新屋敷D-9	A	高坏	D区60号墳	新屋敷C-9	A	高坏	C区35号墳
新屋敷D-10	A	高坏	D区60号墳	新屋敷C-10	A	甕	C区35号墳
新屋敷D-11	A	甕	D区60号墳	新屋敷C-11	A	甕	C区35号墳
新屋敷D-12	A	甕	D区60号墳	新屋敷C-12	A	甕	C区46号墳
新屋敷D-13	A	甕	D区60号墳	新屋敷C-55	A	甕	埼玉将軍山古墳
新屋敷C-1	A	甕	C区4号墳	新屋敷C-59	A	甕	B区15号墳
新屋敷C-2	A	甕	C区4号墳	新屋敷C-61	A	甕	埼玉二子山古墳
新屋敷C-3	A	甕	C区4号墳	新屋敷C-62	A	甕	埼玉瓦塚古墳
新屋敷C-4	A	甕	C区22号墳	新屋敷C-63	A	甕	埼玉瓦塚古墳
新屋敷C-5	A	甕	C区23号墳	新屋敷C-64	A	甕	埼玉鉄砲山古墳
新屋敷C-6	A	甕	C区26号墳	新屋敷C-65	A	甕	埼玉将軍山古墳
新屋敷C-7	A	高坏蓋	C区35号墳	新屋敷C-66	A	甕	埼玉将軍山古墳
新屋敷C-8	A	高坏	C区35号墳				

第6表 遺跡タイプ分類一覧表

試料 No.	タイプ 分類	器 種	遺 跡 名	試料 No.	タイプ 分類	器 種	遺 跡 名
新屋敷C-18	A	円筒埴輪	C区4号墳	古凍-20	J	人物埴輪	古凍7号墳
新屋敷C-45	A	原土	C区谷部	新屋敷D1-1	K	円筒埴輪(赤色)	D区58号墳
新屋敷C-46	A	円筒埴輪	埼玉稲荷山古墳	新屋敷D-2	K	円筒埴輪	D区60号墳
新屋敷C-50	A	円筒埴輪	埼玉瓦塚古墳	新屋敷D-6	K	朝顔形埴輪	D区60号墳
古凍-15	A	円筒埴輪	古凍8号墳	新屋敷D-7	K	円筒埴輪	D区61号墳
新屋敷D1-2	B	円筒埴輪(灰色)	D区58号墳	新屋敷D-8	K	円筒埴輪	D区63号墳
新屋敷D-4	B	円筒埴輪	D区60号墳	新屋敷C-14	K	円筒埴輪	C区1号墳
新屋敷D-5	B	円筒埴輪	D区60号墳	新屋敷C-16	K	円筒埴輪	C区4号墳
新屋敷C-13	B	円筒埴輪	C区1号墳	新屋敷C-20	K	円筒埴輪	C区22号墳
新屋敷C-15	B	円筒埴輪	C区4号墳	新屋敷C-24	K	円筒埴輪	C区40号墳
新屋敷C-17	B	円筒埴輪	C区4号墳	新屋敷C-25	K	円筒埴輪	C区40号墳
新屋敷C-19	B	円筒埴輪	C区22号墳	新屋敷C-26	K	円筒埴輪	C区40号墳
新屋敷C-21	B	円筒埴輪	C区26号墳	新屋敷C-28	K	円筒埴輪	C区52号墳
新屋敷C-22	B	円筒埴輪	C区26号墳	新屋敷C-30	K	大型円筒埴輪	C区埴輪棺
新屋敷C-23	B	円筒埴輪	C区26号墳	新屋敷C-31	K	円筒埴輪	馬室2号室
新屋敷C-27	B	円筒埴輪	C区43号墳	新屋敷C-33	K	円筒埴輪	生田塚D-1号捨場
新屋敷C-32	B	円筒埴輪	馬室2号室	新屋敷C-35	K	円筒埴輪	生田塚D-17号室
新屋敷C-37	B	円筒埴輪	生田塚J-25・26号窟	新屋敷C-36	K	円筒埴輪	生田塚D-21号室
新屋敷C-47	B	円筒埴輪	埼玉稲荷山古墳	新屋敷C-40	K	円筒埴輪	生田塚W-32号室
新屋敷C-48	B	円筒埴輪	埼玉二子山古墳	新屋敷C-41	K	円筒埴輪	生田塚W-36号室
新屋敷C-54	B	円筒埴輪	埼玉將軍山古墳	新屋敷C-42	K	円筒埴輪	生田塚W-36号室
新屋敷C-57	B	円筒埴輪	小沼跡地1号墳	新屋敷C-49	K	円筒埴輪	埼玉二子山古墳
新屋敷C-58	B	円筒埴輪	B区15号墳	新屋敷C-51	K	円筒埴輪	埼玉瓦塚古墳
新屋敷-5	B	円筒埴輪B類	C区35号墳	新屋敷C-52	K	円筒埴輪	埼玉將軍山古墳
新屋敷-6	B	円筒埴輪B類	C区35号墳	新屋敷C-56	K	須恵貫埴輪	埼玉中の山古墳
古凍-5	B	円筒埴輪	古凍1号墳	新屋敷C-60	K	円筒埴輪	B区17号墳
古凍-6	B	円筒埴輪	古凍1号墳	新屋敷-1	K	円筒埴輪A1類	C区35号墳
古凍-7	B	円筒埴輪	古凍1号墳	新屋敷-2	K	円筒埴輪A1類	C区35号墳
古凍-8	B	円筒埴輪	古凍1号墳	新屋敷-3	K	円筒埴輪A2類	C区35号墳
古凍-10	B	円筒埴輪	古凍7号墳	新屋敷-4	K	円筒埴輪A2類	C区35号墳
古凍-12	B	円筒埴輪	古凍7号墳	新屋敷-7	K	円筒埴輪C類	C区35号墳
古凍-13	B	円筒埴輪	古凍7号墳	新屋敷-8	K	円筒埴輪C類	C区35号墳
古凍-14	B	円筒埴輪	古凍8号墳	新屋敷-10	K	円筒埴輪D類	C区35号墳
古凍-18	B	円筒埴輪	古凍10号墳	新屋敷-11	K	円筒埴輪E類	C区35号墳
下道浜-3	B	円筒埴輪	古墳跡	新屋敷-12	K	円筒埴輪E類	C区35号墳
新屋敷-14	C	大型円筒埴輪	C区埴輪棺	新屋敷-13	K	朝顔形埴輪	C区35号墳
新屋敷C-39	D	円筒埴輪	生田塚W-32号室	古凍-2	K	円筒埴輪	古凍1号墳
新屋敷C-38	E	円筒埴輪	生田塚J-25・26号窟	古凍-4	K	円筒埴輪	古凍1号墳
古凍-3	F	円筒埴輪	古凍1号墳	古凍-16	K	円筒埴輪	古凍8号墳
新屋敷C-34	G	円筒埴輪	生田塚D1号捨場	古凍-17	K	円筒埴輪	古凍8号墳
新屋敷C-43	G	原土	生田塚35-粘土探掘坑	古凍-19	K	人物埴輪	古凍7号墳
新屋敷C-44	G	原土	生田塚35-粘土探掘坑	古凍-21	K	大刀形埴輪	古凍4号墳
古凍-11	H	円筒埴輪	古凍7号墳	下道浜-1	K	円筒埴輪	古墳跡
新屋敷C-29	I	円筒埴輪	C区52号墳	下道浜-2	K	円筒埴輪	古墳跡
新屋敷D-3	J	円筒埴輪	D区60号墳	下道浜-4	K	円筒埴輪	古墳跡
新屋敷C-53	J	円筒埴輪	埼玉將軍山古墳	下道浜-5	K	円筒埴輪	古墳跡
新屋敷-9	J	円筒埴輪D類	C区35号墳	下道浜-6	K	円筒埴輪	古墳跡

報告書抄録

ふりかき	しんやしきいせきDく							
書名	新屋敷遺跡D区							
副書名	大蔵省鴻巣宿舎建設工事関係埋蔵文化財発掘調査報告 第1分冊							
巻次								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第194集							
編著者名	昼間孝志・大谷 徹							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4丁目4番地1					TEL 0493-39-3955		
発行年月日	西暦 1998(平成10)年3月31日							
ふりかき 所収遺跡	ふりかき 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんやしきいせきDく 新屋敷遺跡D区	さいたまひらふんとうろくしゆ 埼玉県鴻巣市東 4丁目384番地 12他	11217	42	36°03'44"	139°31'14"	19940701～ 19950930	22,000	宅地建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
新屋敷遺跡D区	集落跡 古墳跡	先土器時代	石器集中3・礫群7		ナイフ形石器・尖頭器		帆立貝形前方後円墳1基を含む古墳群の調査で、供獻土器や埴輪が検出された。	
		縄文時代中期 古墳時代前期 古墳時代後期	竪穴住居跡1・土壕14 竪穴住居跡1 古墳跡25		縄文土器・石器 土師器 土師器・須恵器・埴輪・ 鈴鏡・鋤先・紡錘車			
		平安時代 中・近世	竪穴住居跡69・井戸3 掘立柱建物跡18 横列跡13 井戸64 土壕803 溝85 不明遺構3		土師器・須恵器 陶磁器・かわらけ・木製品・石製品・鉄製品		掘立柱建物跡、横列跡、井戸、溝で構成される17世紀後半～18世紀初め頃の屋敷跡と思われる遺構が検出された。	

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第194集

鴻巣市

新屋敷遺跡Ⅰ区

大蔵省鴻巣宿舎建設工事関係埋蔵文化財発掘調査報告

〈第1分冊〉

平成10年3月26日 印刷

平成10年3月31日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里村船木台4丁目4番地1

電話 0493 (39) 3955

印刷／巧和工芸印刷株式会社

新屋敷遺跡口区全測図

